

都々逸資料紹介

菊池真一

菊池所蔵の都々逸本を翻刻紹介する。

一 『都々一葉うたあだくらべ』(幕末刊か)

とゞ一はうたしん内入」(表紙)

都々一葉うたあだくらべ

雪すみ作

国信画」(見返し)

「都々一はうた」あだくらべ序

花になく鶯のうたひ女水にすむ川面の座敷にうたふをきゝてはぎと
こをみなの心もつかれ目に見られぬお二階のお客もをどる其ひとふ
しのあだ文句諸大人の」(序オ)

口ずさみを其まゝこゝに雪集てあだくらべと題し梓にあることは田
舎そだちの野夫鶯蛙面の小丁稚に至る迄も花のあしたの居つゞけに
水脚子の爪引いきな世界をしらしめんとての業なり

玉? 團雪住誌」(序ウ)

鳥かけ

(三下り)鳥かけにねづみなぎしてなぶらるゝこれも心のうさはら
しくちがのませるひやさけもしんきしんくのア、しやくのたね

だてもやう

(二上り)わしがサア圍さで見せたいものは昔しや谷風いまたても
やうゆかしなつかしみやぎのしのぶうかれまいぞへ松しまほたるし
よんがへ」(二オ)

二たせがは

(本てつし)うそとまことのふたせ川だまされぬきでたまされてす
ゑはのとなれやまとなれわしがきみゆゑならば三ツまた川のふねう
ちおもひたけを御さつし

君は今

(二上り)きみ今ごろこまがたあたりないてわかれし山ほとゝきす
月のかほ見りや思ひ出す

同

あふはわかれのかねてはしれどけさのきぬ／＼いつよりつらいのこ
る袖のかわすられぬ」(二ウ)
もとうた

(本てうし)あだなゑがほに「ついほれこんでつまこうきじのほろ、
にもちひろのふみをかきがねのことづてたのむつばめのたよりうそ
ならほんにかほとり見てとはがひのはだにいだきしめそれなりそこ
へとまりやまうれしいしゆびじやないかいな」(二才)

あだなゑがほ

(本てうし)ういたすがたに「ついほれやすくおしのはいろにまよひ
きてなみのうねくうきねどりそひすかめめのめうとづれこうり
し夜半をあたくめられてあたくめかへすめくめどりとすがらうれし
なくちどりがるゝはづじやないかいな」(二ウ)

もんく入どいづ

ひと目おけりやついそなたにも(しん内)おもいもふかき川竹
のながれよるべもさだめなきこゝろじやけんにあたるぞへ

そでからおちたるふみとりあげて(せきの戸)これこのやうには
じめからきせつせいしをとつかはしふかいおかたがありながらかく
しておいてまたわしに「いろよいへんじもあきれきる」(三才)

もとゆひのきれてしまへば根も葉もないが(白木やの段)そりや
開へませぬ才三さんおまへとわたしが其中はきのふやけふの事か
いなやしきにつとめたその内にふつと見そめてはづかしい恋のいろは

をたもと)きけばきゝ腹からがた

月のまるさと恋路のみちは(とききは津)ちいさいときからおまへ
にだかれ手ならいせいといわしやんしてお手ほんかいてもらふたが

いろのいろはお師匠さん)どこのいづくもおなじこと(三ウ)

はるかぜにそよとあがりしあのとんびだこ(むしうり)どうでに

ようぼにやもちやさんすまいわたしばかりがほれてあてうそのへん

じをまことゝおもひ)ひとのしやくりにやのりはせぬ

ゑほうまいりに初々をかけて(きよ元梅のはる)はるげしきうい

てかめめのひいふうみい)よふて竹やのふねをよぶ(四才)

かわすきしやうはほごにはせぬと(ひよつとおくのきやくがいきな
やつでそなたのきがかはらふかと)いひなますほどわすられぬ

おもひきれとはむかしのことよ(ほり川の段)そりや開へませぬ

伝兵衛さんおことばむりとは思はねどそも逢かゝるはじめよりすへ

のすへまで云かはしたがひにむねをあかしあいなんのゑんりよも内

証のせわしかれてもかんにきぬほんの女夫とおもふもの)おもひき

られるざりかいな(四ウ)

人のうわさにせけんもせまく(らんでう)おまへのそふしたかん

しやくはつねのことゝはいひながら四ツ谷ではじめてあふたとき

いまのおもひをかくしづま

かほでしらせて目もとできとり(とみ本おしゆん)見てみぬふり

のせなとせなおとこのかみをかんざしでかきなでながらこゑくもり

そりやすげないぞ白ふちさん源太さんいかにせきとりさんじやとて

ちからばかりか心までそのよにつよいものかいな)ばんにあをふと

はむねとむね(五才)

かた事いふたるやぶうぐひすもみがきあげれば仲の下

泣もじれるもふさくもおまへ是がくがいの(二三)

ふとした事からつひのりが来て雨のふる夜も風の夜も(五ウ)

あふた初手から身にしみく(と)???)四ツ谷ではじめてあふ

たときすいたらしいとおもふたがいんぐわなゑんのいとくるまめぐ

りくおふやまのせきそん様のひきあはせ(こらへじやうなくな

つかしや

おまへのうは気をしりつゝほれて(紙治)なかしやんせくその

なくなみだがしゝみ川へながれて小春さんくんでのむはいな)りん

きするのめぬしのため(六才)

よそにまつ身のあるとはしらず(「ふちかつら」はなきそふてうは
かすみののべをまつ日かげのきゝははるをまつ)わたしやこがれて
ぬしをまつ

おもふわたしにおもはぬおまへ(「朝がほ日記」又も都をまよひ出
いつかは廻り逢坂の関路をあとに近江路やみのおはりさへ定めなく
恋し／＼に目をなきつぶしものあいろも??の陸にさまよふかなし
さは)いつかおまへに大井川(「六ウ」)

実と真事で咲たるはなは仇なあらしじやちりわせぬ
便りや有かと聞れる度に捨られましたといふつらさ

煙草のむさへつうか／＼と主のまねしてわらはるゝ(「七オ」)

こちの黄菊をさきや白ぎくよとゝかぬ苦ろうを作りきく

今は年季が永いといふが月日の立のわはやひもの

屏風の中をば退ひて見たら足が四本でちくせふめ(「七ウ」)

主をおもへば照日もくもるなぜかおまへはこうだらう

今朝の嬉しさ袖引雨にぬれて匂ひし菊の花

あはぬつらさに手前の文をかみとおもつてかけまのり(「八オ」)

ふいと目につくたがひのいんぐわゑんはいなものあじなもの
夢にみるよふじやほれよがうすひ爽にほれたらねぶられぬ

雨のなじみの客人よりも雪の初会がたのもしい(「八ウ」)

四角なおまへのほれたもゑんよ丸くせたいがして見たい

わたし肝にくろふをさせて末に手切もよく出来た

およそ世間にせつないものはほれた三字に義理の二字(「九オ」)

来てはちら／＼おもはせぶりめ今日もとまらぬ秋の蝶

内じやもてるが遊びじやもてぬ女郎買をばやめにした

爪びきの心意気からふとした縁で今は人目をしのび駒(「九ウ」)

切てしまふとがながけすれどあいそづかしの??がない

泪ふき／＼??くだんをかけちの神だのみ

異見されゝばたゞうつ向てきひて居ながらおもひだす(「十オ」)

ぶてばそなたはじやけんといふがのろけてそなたをさすりやるか

時鳥／＼とてつひ夜があけた主を待夜も其通り

りんきせぬのは女の道とうは氣したさの得手かつて(「十ウ」)

二 『げいしや都々逸』(幕末刊か)

げいしや都々逸(表紙)

片腕にたらぬわたしを是此やうにたゝいて手柄さんすのか

妻子あるのが今更しれて二世といゝしもみづのあわ(「十五オ」)

先が曲て出るならわしも意地で車を横へ引

うそも真言もしうちでしれる口はどうでもきけるもの(「十五ウ」)

いけんするのはしんみの人と思ひながらもうらめしい

夫程にくけりや口かづきかずいつそ殺して下さんせ(「十六オ」)

人の異見が成程今は胸にこたゆる事ばかり

知ぬわたしをなぜ惚させに来たのがおまへのあやまりサ(「十六ウ」)

見捨られたか雁がね一羽たのむ目あてに啼て行

譬へ二階はせかれたとても軒ば三尺いつもやみ(「十七オ」)

夕べへだてし霞が今朝は晴て朝日に匂ふむめ

水ももらさぬ中みておくれ外へうつらぬおけの月(「十七ウ」)

さみせんの糸より細き芸者の身でもはりといきちで切はせぬ

人は鳥渡見て一寸惚するが私や能見てよくほれる(「十八オ」)

なげた枕につみとがないがながけにや手枕させられぬ

二世も三世もそあふたいわぬ此世でそいさへすればいゝ(十八ウ)
姿は見せずし一声聞し心憎さよほとゞぎす

実と情の種さへ蒔ばはなれまいとの花がさく(十九ウ)
あすはしらねどきのふはむかしけふは命にかへてあふ

逢た今宵の二人が中は価千金五わりまし(十九ウ)

夢のよの中ゆだんはならぬ枕ともなるたばこぼん

こそその浮世の実のひとにめぐりあふまでする苦勞(二十ウ)

夢も結ばぬはなしのうち情しらずの明がらす

兎角浮よは俛にはならぬほどのよい人実がない(二十ウ)

雲りがちなる心の闇を晴て逢よの月をまつ

寐がほに見とれて枕にすがり惚れてもよいかとひとり言(二十一ウ)
オ)

二世や三世じやまだそいたらぬ千代も八ちよも万代も

い気な男に浮気ななぞをかけてといたるしゆすの帯(二十一ウ)

三 『華袋 竹の巻』(幕末刊か。一荷堂半水編)

華ふくろ 竹の巻

一荷主人水編

貞俗画(表紙)

(口絵)

(口絵)

華袋 竹の巻 目録

うかれよしこの部

流行端歌百々逸之部

うたいりどゞいつの部

東都歌度々一之部

しんさくよりぬきおゝつゑぶしの部

佐和理下、一

はやりうたいろく

座誦俄

手づまのたねいろく

輶編 一荷堂半水

画図 長谷川貞俗(目録)

明す中にも苦はさせまひとおもふてちつとは嘘もつく

おもひ染たるそのときからもし案の外とはおもやせぬ

つれなくかへせばこがるゝ人に逢れぬうらみがむくふやら

く知もいふまひモフこのうへはじせつまつより外はない

万事おまへがはずはなゆへにすへをあんじる切はなれ(二ウ)

待て下んすそのしんせつでおりにや一度もきさんすりや

おまへの得手物口鉄砲ではなしや立つく人はない

夜さへ短かくゆめさへろくに見たる間もなく明のかね

仇とけ女にこのかよひ路はこれもなんぞの因業たろ

今宵逢たらまたしばらくは陰の瀧氣(のろけ)で日をおくる(二ウ)

悪性男もまもつて居れば浮気もちつとはやむである

添て見たればうはきもなくて今迄した苦が馬からしひ

わけも聞ずと只やみ雲にくらひなぞとは曲がなひ

ほれてくれたでツイふんべつの狂ひだしたであひとげる(二ウ)

うはきどころと看ばんかけて色の問屋が仕て見たひ

縁のき綱に身を引かれて(一〇)登り夜ふね(二上り)のぼり夜舟は
かるじやろじやとて梶をとつた系佐太や牧かた淀水にくるまはくる
／＼と伏見へ(七ウ)つくへヨ、イ／＼脚半の紐じやまひとつじ
や三尺帯じやまひとつじや笠じや簪じやシテあるくのじや(こふな
りや野山の里迄も)

まさかすげなひそ振もならず(一〇)どふじやあいかと(本てうし)
どふじや逢かと座敷でとわれこちや此頃はと眼になみだうき世
(八才)の義理にからまれているはひなつらひしんくをするわいな
なみだ隠してわらひ顔

むごい仕打になを意路立て(一〇)おもひ込だる(本てうし)おもひ
こんだるわが恋は先が邪見で切こうじようたとへきれてもきれはせ
ぬ思ひにおもふた人じやものまだわたしや未練があるわいなそり
やおかぬよ死るとも(八ウ)

やがてあふ身のそのうれしさに(一〇)めくる日や(本てうし)廻る
日やはるがちかいとて老木の梅に苦やぎて其しほらしや／＼かほり
ゆかしと待わびかねてさゝなきかける鶯のきてはさこ寝をおこし
つゝさりとは氣みじかな今帯しめてゆくわいなほうほけきやうの人
さんじや(こゝろそはつく事ばかり)

うはき聞たびエ、腹のたつ(九才)(一〇)露は尾ばな(本てうし)つ
ゆは尾ばなと寝たといふ尾ばなは露とぬぬといふあれ寝たといふ寝
ぬといふをばなはほに出てあらわれたにくひおまへのうはきづら
義理も人眼も何いとやせぬ(一〇)ほれて通へば(三下り)ほれてか
よふになにこわからふ今宵も逢とやみの夜道をくよ／＼と先やさほ
どもにおもやせなひ(九ウ)にこちやのほりつめあはう／＼とな
くからす(まこと明した中じやもの)
もつれさせたり又とかせたり(一〇)柳よ／＼(三下り)やなぎよや

なぎよすくなる柳いやな風にもなひかんせ(ことば)あちらへゆけ
ば浅くさのくわんのんこちらへゆけば芝の神めい／＼ア、どちらへ
いたらよからウやら(十才)しあんばし(ことば)なにはともあ
れちよきで来なさい(にくや心がむすばれる)

そめた恋中また覚るか(一〇)紫の(三下り)むらさきのゆかりの
色やかきつばた染てなまなくよ／＼とあけくれこがれてくらす
二(色でこの身をやせさせる)

後前思ふてあわずにいれば(一〇)同かへうた(十ウ)世の中に義
理ほどつらい物はない惚て生中くよ／＼と明くれこがれてくらす
二(やつれすがたにさとられた)

またの約そく指折かぞへ(一〇)いつしかに(二上り)いつしかに君
を待乳のやま／＼こへてかよふ五十騎駒がたや千鳥かめめの心があ
らばしらひげさんへしん実しんからくわんかけてちよつとおかほを
見めぐりならばうれしの森であるぞいなそれ／＼それも(十一才)
そうかいな(うれしおもひに鼠なき)

土手の夜風の身に染迄も(一〇)同かへうた(衣紋さか今宵くるわの
あふ瀬の首尾をはしばのあめにしつぼりときみは山谷の三日月さん
よ真実しんから願かけて二ツまくらでたのしむならばうれしのもり
じやあるぞいなそれ／＼それもそふかいな(十一ウ)かよはさん
すりや実意づく

ふさぎつめてはおもひの色に(一〇)高尾(三下り)もみちばの宵葉
に茂る夏木立はるはむかしになりけらし世わたる中のしな／＼にわ
れは親はらからのためにしつみし恋の淵うかみもやらぬ流れの(一
十二才)うき身たばこのんでも煙管よりのどが通らぬ流れふり泣
てあかさぬ夜はとてもし人のながめとなる身はほんにしんくまん
くの苦のせかある四季の紋日はをぐるまや)めぐりあふ夜をたのしみ

に

いろといふまもしはしの中よ(○ちるはうき 三下り)ちるはうき
きちらぬは沈む紅葉ばのかげは高尾かやま川の水のながれと月(十二ウ)のかげ)かわるならひのやるせなき

たより嬉しひ今よいの首尾に(○心閑屋に 本てうし)こゝろせきやにかわすが笑ふサツサそこでそふじやエ一人寝がちのたがまくらばし月がないたかほとゞぎす早瀬にさほさす竹いかだ隅田に千鳥のアレはし揚じや夜の雨)ぬれて二人が肌とはだ(十三才)

かくし立すりや猶氣がまはり(○見たいな)二上り)見たいな
な(ふ箱の内をのぞいて見れば玉手箱あけて見ればナ文ではなふておつぽねさんの大事の(夜のもの)ひよんな所をさくりだす

そつと深山で咲せし花を(○同かへうた)見たいな(吉野の桜のぞいて見たれば花ざかり折て見ればナ花では無(十三ウ)て山ぶしさんの大事の(鼻のさき)すかんやつめに奥(かき)だされ

おもひ込るわたしが願ひ(○どふぞかなへて 二上り)どふぞかなへて下さんせ妙見さんへくわんかけて参る道にもその人にあいたい見たいおもへどもこつち計りて先やしらずエ、しんきらしひじや(十四才)ないかゝるな)先へとゞかばいのちまで

野方な人でも突意にや惚る(○さいとう 本てうし)斎藤太郎左衛門ちよつと(あいたいことじやとナアるす)どつこいた隣にかざりとはあいたいナあいた見たさは飛立計り籠の鳥かやうらめしや首尾を見合せそ、りぶし宵にやきもせで夜なかにやたゞこの誰めと(十四ウ)しげるやらざりとはつれない君ゆへならで茶だちしほだちおさめだちさか(さいのわたし守ちつとめ

いじやないかいな)すいは浮きでたよりない

おもひかなふて身戻なくらし(○うきよ小路 三下り)うき世小路にうきよをのぞく浮世のほかの世帯して木具で飯くらうにしき出の茶碗はしがみは旦那さんのし乙子の朔(十五才)日はをくら野なすびは重家からあくおけがエ、(わしや氣にかゝるア、(うきよじやわいな)姓はなふても玉の(し)きがねくらしいなんのその

ひとりに誠が立たいばかり(○今宵忍ぶなら 本てうし)今よしのぶなら笠きて舞きてしのばんせひとがとがめたら竹の子ほりじやとしのばんせ)せけんで嘘をばつくらき(十五ウ)

のせるおまへに私やのるきなり(○川かぜに 二上り)川かぜにすだれまくりてふねの中仇なすがほにあらひがみちよつと松ばにつげの揃さそかさそまいかサ、そこらはどふじやいなエ、さすきじやエ)まゝよながれにまかす身は

せめてゆかしひうつりがなりと(十六才)(○引すぎに 三下り)引すぎに間夫をかへしてたゞほうぜんと覗ひきよせかくふみの身にしみ(とあけのかね二かゝるをまはらしやりませうとかなぼうひく)こゝろだよりに寝るつらき

うきよ半ぶん月夜はあれど(○かたみくき 菊の、ついせんうた 二上り)くらきよりくらきをてらすとらうのおのが迷ひにその人を切り今ほうわ(十六ウ)さのみ世の口のはに種なしと菊野があとのかたみ草)やみと迷ふおまへゆゑ

しらぬ他国へ手を引あふて(○越後の国の 二上り)桑ちこの国の角兵へじくに出るときやおや子づれし、をかむつてでんぐりがへつてちよつと立ますおやちやまじめでふ糸をふく)苦勞するものも承知づく(十七才)

去ばいなんせサア此まゝで(一〇くろい羽をり 三下り) 黒いはを
りはエ／＼エ／＼にある) なんのかへそ、いつまでも

いまさらおまへに捨られるとは(一〇菊の露) おもわじなあふはわ
かれといへどもくちに庭の小菊のその名にめで、昼はながめてくら
しもせうが夜を／＼(二)におく露の露の命のつれなやにくや(十
七ウ) 今はこの身にあきのかぜ) しらすなびいた口おしき

せけんはらしてあふたるからは(一〇かよふかみ 本てうし) 田こ
とにうつる月かげならで夜(二)にうつすまくらのかづの中に粹あり
ぶすいありすまぬ心にしてむ月の何がしんきのたねじややら戻めづか
い(十八才)を余所にしてまかせぬ首尾をわけあるやうに愚ちな
せりふも恋のじつすへは野となれやま水の神にゑにしをまかせな
ん) どふぞ切ずにいつまでも

それと聞ほど尚あいたさに(一〇ひとつ夜ぎ 三下り) 一間へだ
て、恋のやみかこぬといふもつたわれて見てもふかいはうらやまし
ぬれてちようづの水くさきはなれぬ中じやあるま(十八ウ) ひけ
れどなんのかのなきひとつ夜着) しゆびも程よい四疊半

くらうしたのもむかしと成て(一〇扇づかし 二上り) 花のいろは
うつりにけりないたづらにこれ見よがしとでんちうでたがいにぬれ
し袖あふぎかほはひあふぎあこめせん名もいわもとのみやしるにく
せつ扇の吉例扇な四座あふぎ八重ひとへ(十九才) 千代の舞づ
るうつし絵やあふぎのかづはつきせねど一家ひらけばあめがしたみ
なはるなれやよろすよもなをあんぜんぞ目でたけれ) 今ほうれしく
添た中

にくひうらみはそりやあはぬ先(一〇ゆかりの月 本てうし) うし
と見しながらのむかしなつかしやかわひおとこにあふさかの関より
つらひ世のならひおもはぬひとに(十九ウ) せきとめられていま

は野ざわのひとつ水すまぬ心の中にもしばしすむはゆかりの月のか
げ忍びてうつすまどのうち広いせかぬにすみながらせまふたのしむ
まこと、まこと、こんなゑにしが唐にもあるか花さく里の春ならば雨
もかほりて名やたゝん(二十才) かほ見りやうれしひ事計り
かわる枕に身はうきしづみ(一〇よる辺 本てうし) まかなくにな
にを種とてうきくさの花にうかれてと月なびく風のさしひきこゝ
ろのかぢにしめつゆるめつ得手に帆をあげのいとまに身をぬき花の
ほんにあこぎがうらにしきかぬどるつまのしどけなきゆくへやいつ
こあま小舟) やるせないぞゑ流れの身(二十ウ)

いかに浮世なおまへじや迎も(一〇夕がほ 本てうし) きのふまで
ながめし花もいつしかにけふはわが身と夏くさの日にぞしをるゝ
うきおもひせめてあはれと夕がほの露のいのちとかねてはしれどし
らではかなきゆめの世や袖はなみだにかわくまも啼てあかしてやま
ほとゝぎす(一)ゑそらにさへわたる月のかゞみはてりながらくもり
がちなるむねの闇早(廿一才) ふけわたるかねの音に迷もはれて
死出のたびいそくゝろかなつの夜の涼しきかたの道もせをてらし
たまはれ三ツのともし火) あまりほゑなひわかれ際

ゆめでくらしした其うれしさを(一〇浦しま 二上り) かすむこつへ
のうつりがちりて花や恋しきおもかげをさつとふきとくはる風に(一
廿一ウ) かすみがうめるはつきくら花の色かにツイうつり気なな
たねの蝶もつゆのとこひよくのてふのよねなく羽かぜかわしてひ
らりくる／＼) とまひあすぶゆきかさくらかはなのなみうつゝし
らなみいく代が恋になれしなげも今ではつらやひとり寝をほんに
おもへばざりとほ／＼むかし恋しきなままくらさだめなやげにやな
くよのなみじをこへてよもきが浦に(廿二才) うらしまがつきぬ
契りをかたるいゑづと) おもひだすほど恋しなる

実もうきもこゝろはひとつ(○ねやのあふぎ 三下り)ねやのあふぎはなみなゑそら言あわぬ思ひをこがるゝよりもあふてわかるゝこと(○そつらやあきのあふぎとすてられて秋の嗣とすてられてわしやどふもエゝならぬエなんとおもふていさんすことかゆる)(廿二)がぬやうにかなめがだいじサアそふじやエ手折もやせん人こゝろながれのみづにさそはれてうはきにひくかかねのこへきけばこゝろすめやらぬ宵の口ぜつに無理なきゝめこといわすかたらず胸せまりかねての事をおもふていさんすこゝろかへそうかゑなそふかいな(廿三才)あくしよ男のつらにくやすかかんおゝすかん品よくあふぎとるそで風になびかかんわがこゝろひかばうれしき君がつま琴)あわして見さんせ胸の中

そつと人めの関ちはこせど(○汐くみ かさづくし 二上り)ぬれによる身はかさゝしてこざんせ人目せきがさいつあを笠とほんにゆびをりその日がらかさまつになが柄のしんきらしそれエ(廿三才)氣をもみぢがさしらはりの愛の子にみさほたてがさやあい(廿三才)がさのすへかけておもひもひらくはんながさしほらしやいとままふしてかへる波の音のすまのうらかけてむらさめときゝしもけさ見れば松かぜばかりやのこるらんまつ風の(うはさは代々に残るらん)とう(うき名の立つらさ)

あふたあしたはツイきがとがめ(廿四才)(○狂らん 二上り)花の夕部のうつりがもれてそらにしられぬ雪の日もかざしてゆかんかざしくさはらふたものとくちもせでわやくな風のいたづらもちがこだくらやにくからぬかわゆらしかむり(うはさしほの目おもたやめのともこしもともつてゆゝ物花のやまさても見こにみこに花のいろぞろへそれで心をまよはするあいや君さまはいつのいつか(廿四才)らあひもせで沖のふねほど(こがりやせぬ宵は見もせで夜

なかにやあはぬなかぬからすのきぬ(はア、しようてこい)わけしらぬみだれみだるゝ塗のしらくもさら(あなたへもつれこなたへさそひしどもなくとぞ見へにけり)かくし立してさとられる(廿五才)

見ればみるほどきほうはの空(○清もと うめのはる 本てうし)春げしきういてかもめの一イニフ三イ四つかあづまへ突羽子のかのもこのもに都鳥いさことゝはんゑはうさへよろず吉はらさん谷ぼりたから船こく初がゑやよいはつ夢を三ツぶとんべん天さんと添ぶりの花のにしきのかざり夜具はたちばかりをつみかさねほうらいさんといわふなる富士を背中にやがため(廿五才)の塩尻ながく居すればほんにいなかもましばたくはしは今戸のあさけぶりつゞくかま戸もにきわひてだい(かくら門札者梅ががさぎの見めぐりの軒にさへつる鳥追が三すじがすみのつれ引や君にあふ夜はたれしらひげの大もりこへてまつちの山と五十崎やそのかねが潮かねこともたのしひ中じやないかゑなおもしろやせん秋らくには民をなで万ざい(廿六才)樂には命をのぶ首尾のまつがへ竹丁のわたし守身も時を得て目出た(こゝにすみだ川つきせぬな(り清もとのさかへさかふる梅が風いく代のはるやにほふらん)おもひかさねた胸の雲

かわらぬまことは幾千代かけて(○とときわづ 老まつ 本てうし)そも(松の目出たき事万木にすくれ十八公のよそほ千年のみどり)を(廿六才)なして古今の色を見すしんの始皇の御かりの時天にはかにかきくもり大雨しきりに降しかばみかどあめを凌がんと小まつの木蔭によりたまふ此松たちまち大木となり枝をたれ葉をかさね木の間すきまをふさぎてそのあめをもらさざりしかば帝太夫といふ職を(廿七才)おくり下し玉ひしより松を太夫とまふすとかや

かように目出たき松が枝に巢をくむ田鶴のよわひをば君にさゝげて
こうそんは龜の万劫ふるかわのながれたへせぬ金銀珠玉どうどうど
うと御くらのうちおさまる宿こそ目出たけれふかい色もつ根はか
たい

○上るりさはりドク一

やせるしんくに又おもひつめ(廿七ウ)(朝がほ)ないてあかし
の風まちにたま／＼あひはあひながらつれなきあらしにふきわけら
れ)とげて添寝がして見たい

○同

わたしやいとわんいくせのくろう(なる戸)めうとの中をてん道
もあわれみあつて困次の刀のせんぎすむ迄はおつとの命たすけてた
べ)どふぞおまへとすへながふ

○同一(廿八オ)

心でころをと直しても(??)さんせんせかゐを尋ねてもまた
とあるまひとの子ぶり眼にちら／＼とかたときもわするゝ間なき三
うらさん)なんのおもひが切らりやう

○同

寝るもねられずイウか／＼と(??)つまかう鹿の果ならでなん
ぎすりのうみやまとくらうする墨うきことをかつかくおふでか身
のゆくえ(廿八オ)いつ迄はてしなにはがた)あふもうつゝのお
もひ)と

○同

明くれうれしくわが身にかへて(菅原ノ三)たけの園の御所奉公
下々の下々たるうし御舎人もつたいたなくも身ちかく召れかんしよ
うの姫君とわりなき中の御ふみづかひ)したる苦勞もいまはあだ
ぜうの姫君とわりなき中の御ふみづかひ)したる苦勞もいまはあだ

○流行うたの部(以下省略)

四 『サハリ都々一図会 式編』(幕末刊か)

浄瑠璃佐和里都々一 式編(表紙)

サハリ都々一図会 式編

森田軍光作

長谷川貞僧画(見返し)

先年。さはり都々逸。儀太夫をませ。それ／＼の情をくわへ。一冊
の草紙となせしに事のほかにイキ強く。文雷(ふみや)此あじをわ
すれかね。代二編の懇丹をめぐらせり。作者其尾にとりつきて。お
こがま敷も智恵をはしらし。人間万事厭翁が。生れついたるぶきよ
う物と。いはれん事もはづかしけれど。只身すぎより口すぎの。箒
より外にとりへなき人まじわりに心をば。春の日なかや雨の夜のあ
くびどめにもなりつらんと。軍光みづからつゝしんで。云云(口
ノ一オ)

娘(ころ)の只一すじに(式三)初日は諸願満足円満二日の日又
二ツ柱細女の神子が舞の袖)むりをむすびの神さまに(口ノ一ウ)
(絵)(口ノ二オ)

恋しきぬしかとよろこびみれば(一)の谷)扱は錠のかげなるか。恋
しとまよふ心からおすがたと見あけるかと。)いとましくるわが
わんへ(口ノ二ウ)

なんのわけやらくわしい事は(ひらがな)しらぬながらも千鳥
が??敵は川を渡さじと水底に大綱小綱十文字に引わたし。ぬし
にじよさいはありやせまい(一オ)

しよての糸ようにかわつたわが身(新口村)奈良の旅籠や三輪の茶や。五日三日夜を明し。?日余に四十兩。つかひ果して二歩残る。せかれてかをもみらりやせん(二ウ)

知恵はあそも思ひはふかひ(二代鏡)さのみ無理とは。思はねど。いかに男のこうけじや迎。わしといふ者傍に置。ね所迄を敷てやり。しんでづくならまけはせん(二ウ)

ぬしにつくしたわたしがまこと(釈七)水の出端へ茶のはな香。そつとさし出す追蹤も。みんなおまへにすかれたさ(二ウ)

おゝてわかるゝ其あげがたに(鳴戸)今一度顔をと引寄て。見れば見る程胸せまり離れがたなき憂思ひ(こんなくがひがあらうかいナ)(三ウ)

わたしの言葉がいつわりなれば(千両のぼり)うつして見たき鏡立写せばうつる顔と顔(じつとながめて目になみだ)(三ウ)

おまへのかをみにやきがをちつかぬ(八陣)都でお別れ申てより勿体ない事ながら。とゞ様や母様を思ふ案じは何所へやら。あなたゝの事が苦に成て。ほんに寐の間も忘かぬ(いつも淋しきねやの内)(四ウ)

いけんきいてもみゝへはいらぬ(イモセ山)尊いも卑いも姫(せの夫といふはたつた一人。けがらはしい玉の輿。おもひきられる中じやない)(四ウ)

ゆふてかゑらぬ事とはしれど(質みせ)夕部の風呂の揚り場で。此腹帯をかゝ様が。見付さんして。コリやお染。此腹帯は何事ぞ。おもへばかなしいうきいのち(五ウ)

ぎりがかさなりや人目もはじす(式度目)其覚悟とは初から合点して居ながらもあんまりほいいい愛別れ(あとはいわづにないじやくり)(五ウ)

おまへのうわきはもとより承知(山しな)茶屋の茶よりも氣の花香。お察からふと悟気せぬ詞の塩茶系ひさまし。どふて男はあくしよ物(六ウ)

あわぬ其夜はおまへのことを(帯屋)案じ過して何にもいわず六角堂へお百度も。どふぞ夫にあかれぬよう。ひよんなころののでぬよう(六ウ)

恋に心もわしやもつれなば(お七)事をわけてのお詞を。さらさら無理とは思はねど。飯の契りも二世迄と。云かはしたる恋中を。きれてはつながらるゑんじやナイ(七ウ)

おさない時からおまへとわしは(お千代)よい女夫じやとなぶられて。都の楓葉色艶もツイ祝言の新枕。いつの代迄の女夫じやへと。問たりやお前が糸がをして。かわいがられた事もある(七ウ)

恋にあこがれ身はやつれはて(円覚寺)心一ツにとつ置つ。云ては恨恨んでは一人明する。夜明の鳥かはいくと。鳥さへも。いとゞうらめしわがおもひ(八ウ)

ほかにあくしよはせまいとゆうて(雪姫)あの大膳の鬼よ蛇よ。人に報ひが有物かない物か。くひ付ても此恨はらさで置ふかと(むねのほむらで身をこがす)(八ウ)

うわき(ころをわしやふりすて)(鉄炮や)よし有人と思ひ初。二世も。三世も。かはらじとちぎりし事も皆いたづら。かいたせいしもみんなあだ(九ウ)

どふぞおまへにぎりだてしやうと(筆助住家之段)寄くる人になぶられて笑ふて居れど心には。泣て汲出す端香より。なをもまさつたわが身さを(九ウ)

はつのごげんにおもふたおきやく(山姥)そも水揚の初日よりふと逢初て丸三年。何が互の浮気壮りのほる程に。わがみなが

らもばからしい」(十才)

夫婦になるのを只たのしみに(新吉原)色やうは氣を嗜んで。動
大事といひ号の。殿御の事も。そなた事も。恋しなつかし思ふの
を。むねにおさめてしんぼする」(十ウ)

こがれ／＼てしゆひした物を(惣五)火の中。水の底迄も連れて行
とは云もせて。忌はしい此去状。ほんにおとこのつらにくや」(十
一才)

つもるはなしも人目にせかれ(殖生村)其願もせず朝夕に。可愛
がつて下さんした。去状にして情なやなげ打明て死やうに。いふて
聞せて下さんせぬ。む。いしうちとうらみなき」(十一ウ)

そつとかくれて愛まできたに(安達)延より。見れど百の垣のぞ
き早くれ過る風につれ。ほんにうらみなあけがらす」(十二才)

いかにはかないうきよじやとても(忠臣ぐら七だん目)勘平殿は
二十に成やならず死るのは嗚悲しかる口惜かる。逢たかつたで有
ふのに。なぜ逢せては下さんせぬ。此よにおもひはないわいな」
(十二ウ)

せかれ／＼て月日もむだに(朝がほ)身を尽したる愛思ひ泣て明
石の。風待に。たま／＼逢は逢ながら。つれなき風に吹分られ。お
くるつらさも我ひとり」(十二才)

おゝてはなせばこゝろもとけて(杉酒屋のだん)それでわたしも
落付た。必かはつて下さんすなど。ゆうもたがひのさゝめ」(十
三ウ)

大事のおとことおもっているに(宇治)聞へぬ仰やうらめしやと。
主筋放水仕から嫁に成たる嫁氣質。かわいおかたはたゞひとり」
(十三才)

五 『よしこのはなくらへ』(幕末刊か)

よしこのはなくらへ へん(表紙)

(絵) 貞信(二ノ一ウ)

(絵) 二ノ二才)

寒いくらしも身勝手からと咲を苦にせぬ水仙花(都来)

昼の内からそはつく風に雲がつれ出す宵の雨(春翠)

月はさほどにおもはぬけれど兎角梅から持つける(五橋)

おもひ立きる戸尻が明てまでも見合す月の顔(團之)(二ノ二ウ)

何をいふても年若ゆへに色けずくない春の山(五橋)

長い間の苦勞も菊の花にわすれて氣はそゞろ(團之)

子まで有中引わけてやつれ果たる干芋羹(真玉)

とめどない程うれしふ成もはれて逢夜の月見舟(都来)(二ノ三
才)

下手の上手のいやおうなしにころぶ程は愛を見せ(花雪)

露と薄の程よい中も霜と變じて仇と成(大和 亀齡)

高いうはさのつき出じやとて袴式あらそふ綿の舟(桜陰)

水にこがれし苦を絶かねて色をさましたやけ茄子(一鬼)(二ノ三
ウ)

後にやひとつに成とはいへど解ぬ氷につもる雪(桜陰)

露の取もつことわりかねて月もよぎなくやどる草(五橋)

わづか一夜の情じやけれどみれん残した報謝宿(都来)

あだな色からもち込かけて雪を折々乗る松(五橋)(二ノ四才)

風のしわざをこらへし雲が忍びかねては一時雨(管丸)

力なく／＼氣をとり直しひとりしてとく蚊屋の紐(団之)
ついた虫さへもふ是ざりと払ひ落した土用干(都来)

卒度見かけは程よいけれど根葉のおそろし逆の花(林界) (二ノ四
ウ)

当りや砕て跡ないものと解て仕舞た玉あられ(五橋)

あまりきれいに出来たゆく月が松に朝日をそはず色(林馬)

あつき情も若かはるかとうまき水を踏こゝろ(春翠)

風ですれ合とくさの音も聞ば齒がゆい事ばかり(笑雀) (二ノ五
才)

松もみす／＼ぬれたが月も晴にや出られぬさつき闇(笑雀)

水の通ひがたゑ／＼故に浅く成たる夏の川(万丸)

透を忍んでいつしか風があたり付たるかこひ梨(南英)

よいか悪いかまだ見ぬ先に噂しだした初芝居(笑雀) (二ノ五ウ)

たまに逢ゆへ傍はなれずに可愛がられて泣へちま(五橋)

氷い月日にみじかふきられ二度の芽を出さつま羊(林界)

それと見るより追まはされてわきへそれたるのぼり鮎(五橋)

すいも甘いもあぢしるゆへにわかれ際よき杏子種(全才) (二ノ六
才)

すねた枝じやと切はなされて松もほろりとこぼす脂(五橋)

ちよつとじやうつきいふたる事をあとへ引さぬ夜店出し(玉嵐)

綿のやうなる姿と見こみ風がそひよる雲の拳(雪丸)

葬が付て登るもいんげん豆に虫が入てはならぬゆへ(三枝) (二ノ
六ウ)

深い中おも餌につらされて水をはなるゝ魚こゝろ(林枝)

手入したとてさかせる迄は色香わからぬ菊の苗(都来)

縁をきられりやまた望人が多く成たる戎ぎれ(全才)

秋の風からみの落ちくちともめて夜る昼やかま椎(万丸) (二ノ七
才)

花を咲してしばしが程にからい身と成番椒(とうがらし) (笑雀)

すねた姿に一人あいが思ひましたる磯の松(玉嵐)

うまい実入のとこ考て中へつけこむいな(取) (白燕)

桶の輪でさへしまりがゆるみや水もすき間をぬけて出る(大和 亀
齡) (二ノ七ウ)

ほんにお前が窺まめなゆへ逃る小羊もついさせた(林馬)

恋し露にもあはれぬ身かと啼てくらした籠の虫(詠雪)

松に未練の気はないけれど雪のわかれがとけしな(五橋)

風が意地わるするゆへ舟もおもふ湊へ入かねる(南英) (二ノ八
才)

色けづく間をはや待兼てこゝろせきしてとる巖(玉嵐)

かたいちぎりと二見の岩にじつと朝日はそふて出る(梅枝)

きれちやならんと又くりかへしよりによつたる糸つむぎ(花雪)

小声はなしを早きゝつけて何がくらいと蚊もわめく(雪馬) (二ノ
八ウ)

花のかほりを送りし風があしき心をそびき出す(玉嵐)

かくふ身じや故世話がつてんでならぬ苦をする鉢の齒(梅陰)

虫が付たか思もよらず落て乱るゝ熟し柿(一思)

きれるしたちか矢もつゞきかねたるみかけたる弓の弦(万丸) (二
ノ九才)

みれんらしくも荒神松をそつとのぞいた窓の月(林枝)

楽に身がなりや早秋風が気ではそろ／＼ひやつかす(万丸)

なるかならぬかあのほうづきは口のこながし上手へた(花雪)

人にゆびざししらるゝ花も時をはやまるかへり咲(笑雀) (二ノ九
才)

ウ)

つゝみかくして潜たる色も通り抜たる汗襦袢 (五橋)

いふに曾れぬこゝろの底もひよんふかみに出来た事 (全)

はねる積りがやさしい雪にそふてぐんにやり成た竹 (花雪)

月はそふ気である門松は女夫づれゆへわらふ山 (梅枝) (二ノ十才)

風と汐との二道かけてしばしこゝろを沖の舟 (児門)

きれた処を又引出して結びとめたる三味の糸 (雪馬)

弄(なぶられ)てすきにしらるゝ将棋でさへもいやといはずに又さした(笑雀)

つらや我身におぼへが有てかへすことばがはれ立ぬ(五橋) (二ノ十ウ)

松を見込であのやどり木も人めしので咲す花 (飯雪)

かゝる苦勞にみは成下りちぎり人(て)を待ぶどう棚 (雪馬)

月も柳にしつくりそへば風のりん気が見へ通す (山雀)

積るおもひを重てめても人にしらせぬ谷の雪 (雪丸) (二ノ十一才)

のぞみ通にさかせた故かすこし自慢を菊ばたけ (露蝶)

うはべきれたと見せたる筆は真に苦勞をするわいな(大和 亀齡)

早く行ふも出汐におくれ風をたよりにおもふ舟 (清花)

つらや別れに捨こと聞てしばし詞も無じやくり(林枝) (二ノ十一ウ)

ゆびもさゝれぬ岩はな桜落りや流れにうき沈 (露蝶)

松も月には気がはる故に雪にそふてりや出ずいらす (五橋)

ほんにほく性なぶ細工ものが御意に叶ふた奈ら人形 (宝丸)

袴にかほいれきせるを杖にむねの衝をとつおいつ(団之) (二ノ十

二才)

すこし色づきやめ放(ばなし)出来ぬちぎろ／＼とする蜜柑(三枝)

死ぬのいきるの味あるものをくはず嫌ひの鯉と汁(淀 文枝)

あつい異見を今つく／＼とひとり身にしむ秋の風(大和 赤々)

岩にせかれてわかれし水も?場こしては又ひとつ(全 不酔) (二ノ十二ウ)

ふ?や見付のやさしい花も色にかけてはおそろしい(露蝶)

にくや隙をしに来た雲?月もよるか?と気がもめ? (団之)

霞と苔とがそふたる中をむげに引わけはいる舟(花雪)

月の七日は不成といへどそれに逢瀬をとげた星(備前 集丸) (二ノ十三才)

愀氣から出たいけんのやうにしらぬ顔するにくらしさ(飯玉)

風のしやくりをまことに受て露とわかれをしたる草(児門)

松にかひなく今宵の月はにくや梢を打どふり(林枝)

色?つくろふ花かんざしもうらぬ間がこのもしい(玉嵐) (二ノ十四ウ)

かたく成てはなに一応で雪も容易にやとけにくい(大和 漁船)

人手頼んでもつれをいふてまかしや捌ける総の糸(雪馬)

なびく薄の程よきふりに月はあつゞけしたいやら(荷一)

花の色香に通(かよひ)し鳥も今じや侘しき籠住ぬ(姫松) (二ノ十四才)

義りにせまつてたもとをくはへいつか情の味おほへ(玉嵐)

そふて間もなく別れとおもやほんにはかない松の霜(都来)

浅い時からたよりの風と深く成たる帆かけ舟(大和 児石)

思ふこゝろに狂ひがなれば谷をへだてゝあふ砧(梅枝) (二ノ十四ウ)

風に柳のいたづらものと？やさくらがわらひ咲(梅種)

迷ふこゝろのあの蠅も暁(あけ)る軒ばにあはて込(貴翠)

いやじやけれどもさゝねばならぬ義りて貰ふた角の柳(柳糸)

人め埋火おもひを灰へ替た火ばしのふた柱(梅種) (二ノ十五才)

宵にや梢の表を通り更りや裏から忍ぶ月(梅園)

遅かれ早かれ合のじやけれどこゝろそゞろの歌がるた(逸外)

追加

ませた色けをもつ木娘は花を咲せる下こゝろ(象兎) (二ノ十五ウ)

花洛

三条寺町

一条東洞院

新町魚之佃

浪花

心齋橋通北久宝寺町

同本町

堺筋通清水町

丸屋善兵衛

田中屋治輔

丁子屋嘉輔

政賢屋彦七

河内屋和輔

伊予屋善兵衛(裏見返し)

六 『浪花の梅』(幕末刊か)

浪花の梅(表紙)

(絵)(見返し)

(絵)(口絵オ)

みなのお世話でそだてゝもろて花を咲する菊の苗

丸ふしたさのこゝろの辛苦軒に人眼をしのぶ草

思ひ染しに色さへ今はなくて苦勞のたぬ茄子

どろで咲した此かきつばた生て根じめが見てほしい

君が引手の便りをまちてねがひかけたる姫小松(口絵ウ)

今迄は聞と思ひしわたしがこゝろ咲てうれしい花あかり

こらい情なきあなた酌と知つて居ながら感知をいふ

賤が手業に焚付られていつか燃へ出るはつ蕨

花に見とれてつかぬと恋の潮瀬をさす筏

縁のはしかや身を投こんだ人に恩あるはなし魚(二才)

たとへ苦勞をするともまよ心底づくなら是非がない

いつもくはら／＼夕だち雨に落をとりたい雷神(はたゝがみ)

なるかならぬか我かしは手にくちをむすぶの神いのり

加減ほどよおしへてもろて味(うま)ふ馴たいこけらすし

去年(こそ)に積りし口舌も今に解ぬおもひの残る雷(二ウ)

どこへいでゝもぶらつかされてあかひかほする小提灯

猫の眼よりは早気がかはりやニヤンと返事が来るじややら

折てたまはれぬしない花をすてゝおくとはどふよくな

風がなかだちつい筆まくらころびをふたるあさの露

明暮に思ひ忘れしあの山桜いつか実の乗る事じややら(二才)

物はいわねどそぶりてそれと人に見られる壬生念仏

垣にからんだ朝がほさへも露をたのみに花さかす

鯛子合してほどよ三味もやばな引人(ひきて)にや音を出さぬ

風の柳でわしやいて見たい鈴をつけたらなるであろ

打てかわつたわたしが異見ねかす釘じやときかぬふり(二ウ)

世間ひろふに晴たと見へて山もかすみの帯をとく

常に嫌ひな物でもぬしの審がかゝればあじが能い
つゝむうへにも色みし物を落て弘がる契話(ちかは)の文
尋ぬうちからはや顔出して人をわらはすよはるぼし
渡る鳥さへツイ南から北も御ひいきお願ひに(三才)
花は散ても月日をまてばかへり咲する事もある
言葉さけても思ふた人はよそのなのはに恋す蝶
いやかおふかは不知火なれどこゝろづくしの神もふで
杖をちからに咲朝がほのけふはたつとも翌(あす)はなを
いもせ山はなや薄のこぼした露も落て吉野、川となる(三三ウ)
敷に入れどもまだ端(は)しの歩(ふ)でやくにたつのはまれな駒
案じすこしもこゝろのまよひ明日はあしたの風がふく
うき名高砂むかしとなりて今は互ひに友しらす
軒の春雨しづけき中に夜のまくらぞ恋がます
蝶もみれんか東鑑(こほ)ははなれ兼たる花のそば(四才)
ぬしとくぜつにひねりし盛も積るおもひの山となる
不二の雪さへ解ると間に心ひとつがとけにくひ
こがれ／＼て一筆やつて跡で墨附あんじられ
よしとあしとを汲わけかねてふつとこゝろに角(つの)めだつ
好た人なら海山こへて摺鉢うりでもいとやせん(四ウ)
人眼しのべどつい穂にいでまねくおもひのいと薄
きのふもあはねばまだけふもみづうらみいふ身もまゝならぬ
つらや此身は友なし千鳥寝覚さびしく啼あかす
浮草をみるにつけてもあんじはせまい流れしだいに花がさく
わしがちからで咲事はならぬ人の恵みを室(むろ)のむめ(五才)
虫がつくるとほん気にかゝり内にしのびしいてふの葉
しかと調子が合の手ならば人にや聞きぬしのびこま

すきな梅さへ絶たもわたしや粹なあんたに迷ふたゆへ
いつの頃よりつい馴そめて今はおもひの種となる
明た嗣の末広々ともつた要も神かけて(五ウ)
ほんにあんたが酒好きゆへにわたしや餅焼世話がない
露の恵みにそだちし蝶はいつものはなれず二人り連
心知り逢ふたがひの中は言へど跡なき春のゆき
室にいるよりはやませかけて恋が翅ではなさかす
今はやみじで暮していれどやがて見さんせ月も出る(六才)
はでな出花がついくちにあい末は土版で暮したい
まさかそわれぬ義理づめならばのいて私しもたつよふに
意気がきいて身はしやんとしてぬれて涼しい水うちわ
末はどふしてどふなる事といらぬ思案も恋の愚痴
程のよいのにツイほだされてうから／＼とたつ月日(六ウ)
ぬしのこゝろははりこの虎よ何をいふてもくびをふる
ひらく辻うら心のなぞも逢へばおもはずふくむあみ
浅い深いを汲わけさんせどふで流れの身じやものを
余所へ引ばる鳴子の綱の切れてこちらへもどる鳥
玉の盃そこ無ひゆへにおもひざしさへむだになる(七才)
思ひよわりし身はやせ馬でつらや恋路の重荷負(をふ)
雪にしらみしいつわり事もつものうらみのもの思ひ
すいた花にはあらしもいつか末をかけてぞ添とげる
ぬしの浮気は立場の窺で少しなじむと乗りかへる
花は咲てもわしや山吹よほんに夷になる人がない(七ウ)
どこが花やら身はうき草のたより定めて咲したい
忍ぶ切戸にさし込む月は恋の底意をしらぬ野夫(やぼ)
ちゝに心をくだかけのこゝろ明ぬわかれを告わたる

恋の瀬ぶみもまだせぬうちにあだな浮名が先にたつ

君のおこしは玉しま川でもゆる思ひの鶺鴒の火」(八才)

猿が人まね笑をと俣よ耳に手を当て口おさへ

げんげ花でも野に咲よりはどふぞね引にしてほしい

佛の画(系)にもかゝせて似る物ならば主をうつしてはだまもり

ぬしは此ごろ色醒が井でどふもこゝろが水くさる

たとへ転(こけ)ても身はよこしやせぬ風にまかした女郎花」(八

ウ)

たとへ桜の花にもさんせ風のくわゐで散はせん

しのぶ恋じは只ふか／＼と着たる人眼の目せき笠

放し鳥見てわたしも早ふぬしのおそはへ籠はなれ

返す／＼とふみにはかけどかへとむないけふの首尾

直なよふでもあの香車づらまさかなつては横に出る」(九才)

其日／＼に咲朝がほもばけて咲たるはなもある

月に憎みしあの村雲もしのび逢夜は恋しなる

骨を折たる扇も今は秋が来たので投らるゝ

余所の陽気な事みるにつけおもふおかたが??なる

知つていれども馴染がないと軒にうろつくつばめの子」(九ウ)

すねて見せても程よい松は藤が下からまとひつく

月の宿るをうらめしそふにそつと覗きし窓の竹

わたしや色けもまだ白梅のかたい苔と笑らわるゝ

出合ふ思案も月の輪寺で苦勞時雨のさくら花

なんと鳴海がわしやしらねども絞る此身はいとやせぬ」(十才)

鐘の音を聞ぬ顔して?きらしいれどむねがどきつく明の頃

松に散来る桜もにくや風にもまるゝ糸やなぎ

忍ぶ恋じの名は立ゑばし三番叟から人がしれ

千草結びの辻うらあふて人の手前がはづかしい

思案あつてかアノ落梅に宿をかしたる苔の花」(十ウ)

思ひ染しを悟られまじとわきへ心をちらし形

早ふ逢ふと筆とりあげて心せわしふはしり番

煎豆もやがて花咲時節もあるふ焼で暮しておりまする

ほんに思へば愚知なはわしよあだでりち気な人はない

雨の降る日も風ふくおりも通ふつらさの旅の空」(十一才)

風流(はで)な盛りのうき菜の花は油とらるゝたねとなる

人におとらぬ気にはりあれど手折(たおり)てのない花いばら

畝に転んだかほちやじやけれど形(な)りの悪ひはあじが能(よ)

ひ

思ひ詰たる水室のこふり月日たてども解兼ねる

私タシ狐とおつしやるけれどよわるあんなの鉄砲には」(十一ウ)

たまに大原もア、まゝならぬしのぶ此身は八瀬のさと

恋の願ひをかけたる神も一夜女郎とは曲がない

三味せんのひく手あまたの座敷はずれどしのびこまほど身につかぬ

咄し山々やまさきなれどぬしは花火でほんといふ

あかぬれに啼鶯よりもつらや待夜のかねの敷」(十二才)

君と添寝のうれしき夢を憎や蚤めに覚された

おなじ野山でひき残されてまたの子(ね)の目を待小松

いつか途夜を気はせきれいの尻もすわらぬもの思ひ

お氣の短かさ此夜につれて口舌どころか契話(ちわ)どこか

ぬしのこゝろは三圍一で苦勞駿河のふじの山」(十二ウ)

梅のほひがあやにくもれて今朝は小鳥がつげに出る

月と花とのよひ中を見て松はみどりの角はやす

あだ花といわりや意地から椿の枝へむりな接木(つぎ)もせにや

ならぬ

人が大事に植おく花を垣根越とはつらにくひ

文は千束(ちづか)でさくらは千本(ちもと)恋の山じとはなの山」
(十二才)

逢はうれしき先だつゆへにうらみいふのも口ももる
夢に起されふと眼を覚しまたもおもひの忍びなき

人の手いれもない朝がほで垣をたよりに咲くばかり
ひとりうか／＼野山の梅でたれが宿ともしてくれる

宵は酒でもまきれもしよが更(ふけ)るほどなをます思ひ」(十三
ウ)

人眼あるゆへすげないふりもこの手柏のうらおもて
しんき待夜のみくじを上げて来るになるまでひき直す

夕風に佃田の家根ぶねいと憎らしや意気な二上り三下り
辻うらの歌をうたふてついで爪弦(つめびき)も逢でこゝろのしんき
ぶし

風(うと)てなざるをつきなで居たが其所(そこ)の相の手気がつ
かぬ」(十四才)

深い恋じとなる雷のゑんを取もつ蚊やの内
たとへ異見が邪見になろと思ひつめたらの??ぬ

奥の一下間で啼うぐひすの梅をしたへどまゝならぬ
桂男の悪性ものとそばを放れぬ玉うさぎ

おもひ染てもまだ恥かしく野辺のすみれは春の色」(十四ウ)

世間あるゆへ逢てもそれといわぬわたしがせきばらひ
俣にならぬにいとしまささり君にこゝろをつくし翠

おなじ流れにそだつていれど目にもとまらぬこまん鯉魚(こまこ)
なびくのか香をちらすのか柳と梅をこゝろしてふけ春の風

五月雨やある夜ひそかに能(よ)ひ辻うらを松にうれしき月の影」
(十五才)

君は佐保姫すゞみのふねで顔はもみぢに雪の肌
庭の千草も色香を増して日々に栄へる百花園

風流(はで)に咲ても身は高ぶらぬ憎ひこゝろの深見草
追加

松の操もさくらの仇も生る手元に召しやんせ」(十五ウ)

(広告)
大坂心齋橋通南本町
書房 河内屋平七」(裏見返し)

七 『どゝるつづけ』(幕末刊か)

どゝるつづけ 一へん

了古画」(表紙)
あふさい／＼よろこびありや(長うた舌だし)といはひとへにあ

りがたき花のお江戸の御ひめきをかしらにおもき立えぼし)ほかへ
はやらじとたきし??(三川やでん女)

ぶたれたゝかれその手にすがり(しんないふぢかづら)わたしが
つよくさからはゝすいなおまへのお心がかはらしやんすであらふが

の)わけをいはねばわかりやせぬ(とこ藤)(一才)

ほれてわたしがほめるじやないが(清元おちうど)こんなゑにし
がからやうのおしのつがひのたのしみに)なぶられたいのが身の
ねがい(八尾松)

そもやふたりがそのなれそめは「常はづおふさ」ふみでくどかず
人たのまず心のじつをうちつけに「思ひに思ふてけふのしゆび(菊
次)「(一ウ)

むねに手をおきふでとりなをし「とみ元こいなまみへ」ふみのた
よりですましてあはずにいればきにかゝり「どふかきやまことが
とゞくやら(八尾源)

はなのさかりは向じまされて「長うた」野辺のあそびもよねんな
くこりやたがめいきちゝちやなもちやはらの??ちんがちがく
ちんがらこはしりくついでさきへゆくのはさかやのおてんばあ
とへさがねるはおまはりきつぬめ(???)「(二オ)

じつとだきゝめとめをみ合「常わづ新かつま」めいどへいそくた
びごろもうすきぢぎりの???「こゝろでないてもわらいがほ
(???)

わたしのしよふばい朝からばんまでおしゝをかぶつて「とみ元く
らま」大みそかもがんじつももゝ引がけのたびかくらわれとうかれ
る道しほに「しゝのまねしてよをわたる(三川やでん女)「(二ウ)
いろのいのじをふたりでおほへ「(潜元おそめ)なにやらそうしへ
かいたのをそなたに見せてとふたらばこいといふじといふたのをむ
すびはじめのとのこじやと」思ふまもなくけふかぎり(菊次)

はたでどのよにわらふとまゝよ「(潜元ひがへり)おやがしかるが
せかんしよがまゝよのふここれられたとのさがすてらりよか「(常は
づうつほ)をく山のさいかちばらのなかもおまへとならばどこ
までも」そふて見かはす人のかほ(八尾源)「(三オ)

百たびいふてもぬしある身では「(とみ元)くどふいふのがおまへ
のくせよなんぼそのよにせかしやんしても」みさをたてたいこゝろ
さし(羊かつ)

はなのつぼみとこいじのふみは「(きよ)一寸あさぎにふでそめ
ていとしいもじをかゝんすかあはでこがれていさんすかそれで
いろますたまずさを」ひらくあしたをまちかねる(八尾松)「(三ウ)
きやすめきいてもうれしく思ひ「(とこ?)どふで女ほにやもたさ
んすまいわたしばかりがほれていてうそのへんじをま事とおもひ
かげじやさだめしわらふだろ(羊かつ)

めうとやくそくおよびもないが「(常はづ)めりの思ひもてんとや
らどふで女房にやならぬけれど」せめておそばでみやづかひ(紙
菊)「(四オ)

もゝよかよへどさてなきけなや「(しんない)たとへこの身はあは
雪とともにかゆるはいとはぬがこのよのなこりにいまいちど」あふ
てうらみがきかせたい(八尾松)

このよでそれはれぬあくゑんなれば「(常はづ)あのとらまちをでぬ
さきはわたしひとりもしぬかく」はすのうてなであらげたい(菊
次)「(四ウ)

女ふたりがはなすをきくにいつもおとこのさたばかり
さたをするともおとこのやうにせけんかまはずいゝもせぬ
わがほれりやひともかうかとじやすいのくちでかた時はなれること
はいや

あふてのちおもひまはせばいよくちよふかくなるほど人より
も「(五オ)

むすばれしえにしのいとほどふしぎはないよいまはからまるとこの
うち

よのあけぬ国があるならふたりがすんでつもるはなしがして見たい
千のきせうでからすをこらしぬしとあさねがして見たい
あさいとのよれつもつれつもつれつすえはほどけぬえんとな

り」(五ウ)

なみだもろひとわさびにまでもあまく見られる身のひごろ

せうじびつしやり出ていためとはとがなききをたゞきたて
やばにしていきじをはるのあはゆきならでまぶにとけるではらがた
つ

はりつめて見ればいくちで身はなつこふりとけてしまへばたゞの
水」(六オ)

したえだのまゝなるはなはこゝろになくてとゞかぬこずえにくろう
する

こずえとてまゝにならぬでわしやなけれどもまこととゞかぬそのわ
けを

ゆきくれしひとにやどかすあるじのはなもあさのわかればそでのつ
ゆ」(六ウ)

へのやうなねがひなんぞとわらわばわらへおさつてしよくせうがし
てみたい

みぎとひだりにとうなすおさつおいていつせうくらしたい
さけもやめよがたばこもよさうやめてやまぬがいのみち

うめぼしのやうなおなちもそのまへかたははなをさかせしすひのは
て」(七オ)

さく丸撥」(七ウ)

八 『浮礼歌花比 (よしこのはなくらへ)』 (幕末刊)

浮礼歌花比 (よしこのはなくらへ) 三編 (表紙)

楊柳園大人撰」(見返し)

序

水結んで雪となり六の花を顕し下手執行して上手となり名吟を作し
いかでか雨露の枯樹に花を咲すことあたはんやと益積功を勧めるも
のは

楊柳園

嘉永六年大呂」(序オ)

(絵)「(序ウ)

(絵) 貞信」(一オ)

気色もかへられ寝に來た馬もあきれ顔なる雪の松 (白燕
風のたよりも聞のはいやとへだつ思の冬こもり (柳糸)

梅もずはへを成丈のばし添てほしさの月を待 (梅蔭)
世間はれたらおもひの俣としばし我身を忍ぶ月 (花流)」(二ウ)

からみるたのもはやしめ明と抜てわかるゝ松と竹 (弄撥)
のいた当座は氣も落付ずうつゝぐらしの狐つき (露蝶)

すかぬ葉がりをする植木やとらむ鉄にまとふ蕨 (貴翠)
是非に及はず別れたけれどにこり持たる雪解水 (双蝶)」(二オ)

濡たばかりで氣にたらぬやら岩と氷がへばり付 (一思)
末は月そふ身を今更と引ぬ小松が日にしほれ (水壺)

月と守らんみさをの松に雪がうは氣をあふせかけ (笑笛)
夢になりとのねがひも遠ずゆめは我身の夢ながら (和火)」(二ウ)

風のなさけに吹よせられてよるべ定まる塵とちり (河内井蛙)
逆もかくせぬ色あらはしてばつとうき名を立る虹 (却來)

にくや大事の人引かけてどこへゐたやらしれぬ鷺 (万丸)
つもる思がもふたまり兼庭へずり込家根の雪 (逸外)」(三オ)

鷺 (おし) が氣まゝな事するゆへに池もこぼりと張つめる (露蝶)

思がけなく裾まくられて風のわるさが恥かしむ(却来)
高ふとまれど世間の鏡りでくどき落たる米相場(南英)

抜つくりつ田を忍び出草にうは氣をするいな(万丸)(三ウ)
忍ぶすがたをちらりと見られ月をうらんだ郭公(舞雪)

ほんにとがな柱にもたれじれたそぶりをこすり付(淀文枝)
しめてからんでしつかり抱てゆすり上たる米だわら(備前集丸)

もはや朝日がさし出るゆへに陰でせひなくつもる雪(山雀)(四
才)

つくり直した?へおしたてがべつに能(よく)なるはがり松(万丸)
和歌に事よせ送りし文のつらや返事がかたを波(林馬)

鬼と名がつきや瓦のおにもくや中きに風の糸(魚照)
先のやうすがどふやらよくてこゝろ嬉しいさら厝(都来)(四ウ)

忍ぶ恋路をおもはぬ蜘蛛がひどく倍氣の綱をはる(笑雀)
心づくしをしらぬ火ゆへにもゆる思のはてしない(我丈)

ふられ照され其身の果は破れかぶれの雨障子(竹雪)
残る薫にあの鶯がみれんかけたる梅の枝(音一)(五才)

結び合ては又わかれたり風を苦にする女郎花(舞雪)
かたい氷も朝日がそへば解てくるやらわれて来る(笑雀)

君がこゝろの霞ヶ関をしらぬ思に朝ほらけ(淀紫好)
恋の種おぼつる時初て今は互に咲す花(なのは)(五ウ)

露は一夜のなさけとしらず濡に出て来る蝶も有(一思)
つもる雪には式の足ふんで忍びかねたる下駄の跡(六雀)

あれさ見やんせ紅葉の色におもひ染たかからむ薦(飯雪)
尻もすはず一夜さあはにやさらにも、夜のこゝちする(玉水)
(六才)

垣をへだて、降つむ雪も解りやひとつに成わいな(五?)

寝顔のぞいてまた空ながめ月もかはらぬものならば(半水)
腹の中まで見すかしながら秋も捨おく竹婦人(児門)

今宵逢阪こゝろが関路手形なけねばそつと抜(梅民)(六ウ)
梅にうくひす柳にうらみはねて葉先が邪魔をする(桃人)

とんで身がかるく越行蝶をおもやくやしい垣一重(舞雪)
あへば互に顔見合して塵をむすぶが相換とり(貨水)

礼義たつ春氣もあら玉の花はこゝろの内て咲(菊録)(七才)
根から葉迄もきかねばならぬ近所まで葺修羅の種(河内喜来)

むりな思をかけつぎ針に忍びくのかくし縫(江辺)
水の出はなの二人が中はひとつみもきれかゝる(腹丸)

かうなれば堀も人めもいらざる草でつもりくし雪の中(花人)
(七ウ)

あなた計へ日影はさしてつらやこなたは片時雨(五橋)
よその花じやとおもふて見ればひよんな心が出るわいな(雪鶯)

せまく楽しむ小窓の月も照すまことが有ゆへに(定丸)
つもり兼たるまだ初雪はさはる手先につい解る(小団)(八才)

来ぬと定て妻戸をへりや落ぬころゝ(ママ)に又まよひ(五橋)
日々におもひが増わくら葉の色に出たる氣あつかひ(魚寿)

みよつかくれば雨夜のほたる濡のますほど身をこがす(万丸)
逢た時こそ笠ぬく恋よ袖の時雨がはれた夜は(菊詠)(八ウ)

だますつもりで来る妖(ばけ)ものに客は二階でろくろ首(河内喜
来)

千代もかはらぬ色とはきけと遂てそはれん松の雪(梅丸)
ほとゝぎすよりうくひすよりも外にきゝたい声がある(桃人)

向ふ見ずめが燕の留主にしだれ柳へくらひ付(万丸)(九才)
深き沼ある事とはしらずまねく薄にはまり込(五橋)

味なはなしが障子をもると風も穴からりんぎする (逸外)

ぼんとけられちやその顔つきもしほしくれただん鞠場 (六雀)

目角月夜に忍びもならずしらがながらにとぶ螢 (白燕) (九ウ)

松のすげないころとしらず糸がほつくつてすがる藤 (竹雪)

かたい花迄つるそゝなかし蝶のうは氣をみせる風 (逸外)

横に深入する山鳥は道もまよひの朝の霧 (貫翠)

たまの逢瀬を早かへらふと聞もにくげな鹿の声 (萬丸) (十才)

うつり替るは世に有ならひいとゞうき身な水の月 (萬花)

とけて仕舞にやいなしはせぬと妻戸とちたる六の花 (綾丸)

情しらずに戸を立られて軒にうろつく夕つばめ (都来)

まこと無とはあの調飲な主の舌さへ杖がある (大和山助) (十ウ)

かうも苦勞に成もの逆はしらず教し石たゞき (京東舟)

忍び逢夜にこゝろがあらばあちら向んせお月さま (梅枝)

花のかたきとおもふた風をすゞみ床机に待わびる (梅陰)

たまに顔見せつゝ其まゝに座付ばかりで氣がもめる (五橋) (十一才)

逢ほ玉川口舌が過て秋がきぬたの打たゞき (桃人)

せめて一声忍びねなりと聞をかかれたほとゞきす (第草)

花はしほれてあしたを恨み咲はやつるゝ事ばかり (梅園)

風がしやらつきやふるふてゐたに今はからんでねたる草 (半水) (十一ウ)

いやな蜂じやと袖うち払ひ逃りやにげるで迫て来る (都来)

月にむら螢花にはあらしとかくあんじる主の沙汰 (林馬)

水にせかれてはなれてゐれどつなぎ合たる佐のゝ橋 (綾丸)

松の色じやと互にかけでもつれあふたる藤と葛 (万丸) (十二才)

おなじ思かこのあさがほもつらる朝日にしかみ顔 (桃人)

染ぬ松にも氷柱とまでに成てすがりし冬の雨 (萬花)

やつれ姿の柳を見ては雪もきへたいおもひぶり (花流)

踊りまぎれに抜ても来たが忍ぶ影なき軒の月 (都来) (十二ウ)

よれつもつれつする日はあれどぎれるあんじのない柳 (笑雀)

月のそふ樹も数あるけれど中でとりわけ松がよい (翠香)

あたり次第にうつろふ月と水も氷でかたく成 (兎門)

当座ながらも虫ゆくないか色にかこふて置すもゝ (万丸) (十三才)

田から行のも畦からゆくもおなじふみこむ恋の道 (春翠)

枝と添寝に来る鳥さへもそぶり不足かとまりかへ (三枝)

雪も程よく積れば庭の樹木がやつれも苦にならぬ (露蝶)

ふるもすねるも柳の意き地なびかそふとて通ふ風 (梅雪) (十三ウ)

更て待夜に灰かきならしとにも火鉢の火もしよげる (林馬)

程のやさしい手に握られて肌にするよるぬか袋 (都来)

沖に深い眠あるゆへと錠 (いかり) おろして待た舟 (花流)

春に逢とて色めく梅にほふかい格気がつもる雪 (児丸) (十四才)

かぶせ懸たる雪には竹も直なこゝろを曲かける (梅陰)

いづれやつるゝ身と知ながら梅の小枝につもる雪 (背一)

追加

積りちがひとうかめた顔で雪をすげなくはらふ鳥 (象兎) (十四ウ)

花洛

三条寺町 丸屋普兵衛

二条東洞院 田中屋治輔

新町魚之棚 丁子屋嘉輔

浪花

心齋橋通北久宝寺町 敦賀屋彦七

同本町 河内屋和輔

堺筋通清水町 伊予屋善兵衛（裏見返し）

九 『たゝみざん辻占詩入都々いつ』（明治初期刊）

たゝみざん辻占詩入都々いつ（表紙）

吾妻をと子撰

おう卒ゑがく（見返し）

都々逸へ詩（からうた）を雜へ唄ふ事行はれ悉行（ぞめき）の通客が美音夜はさらに昼もまた街衢（ちまた）の辻に喧（かまびす）し故にその唄ひ歩行（あるく）詩入とゞ逸の文句を直に辻占の種となし、此書の第三編と做し先序文をラヤ／＼さうです歎

吾妻雄鬼子述

○たゝみざんつちうらの見やう

このうらないのみやうはたゝみの上へかんざしにしてもなにゝてもなげいだしそのなげたるものゝ先のかたのあたりたるすぢより一トすぢ二たすぢとかぞへ十にてとまれば第十又廿にてとまれば第二十のどゝ一とわきの小がきのもんくをもつてそのよしあしをうらなへばいかなるむづかしきことゝいへどもあたらすといふことなしゆめ／＼うたがふべからず」（一オ）

第一 ○あんたいなものサ

風にたなびくにしきのみはた（英雄旗下幾英雄野戦攻城敢道功）じつにいさましみ代はじめ」（一ウ）

第二 ○いまにいゝひよりになるヨ

しめりがちだよわたしの袖は（黄梅時節家々雨背草池塘奴々蛙）な

いてくらすをみえらしく」（二オ）

第三 ○うかれすぎちやアわるいと

ふんどしよ売ても一合かひな（春宵一刻価千金花有清香月有陰）こ

れじや飲ずにや居られない」（二ウ）

第四 ○ちつとはさはりのあるものサ

なみの音聞がいやさに山家のすま居（独木為橋過小村幾年修竹縹柴

門）それさへやつぱりまつのごゑ」（三オ）

第五 ○このせつのかせだアね

かねは上野かまたあさくさか（山回緑柳常含雨天為紅桃不放釐）今

日もあさから薄くもり」（三ウ）

第六 ○もうちつとのしんぼうサ

まつは愛いとほけふ日のこの身（傷心欲問前朝事唯有江流去不回）

どこへふけたかうちの人」（四オ）

第七 ○きついうちこみやうだねへ

眞身とふたりで世帯（しよたい）をもてば（樞茅為屋竹為椽屋上戸

山屋下泉）どんなすま居も苦にはせぬ」（四ウ）

第八 ○むかしかたぎがよいとサ

たとへもゝとせあはづに居ても（心如金石志似松筠）みさをのか

た意地たてとほす」（五オ）

第九 ○まことにあんしんだヨ

あんじるやさきへ便りときいて（一接家書意便歐外封先已見平安）

すこしおちぞむむなさはぎ」(五ウ)
第十 ○くよくおしでないとす

つる恋路をやまひにかづけ(約臂銀環寛一寸逢人猶道不相思)し
らぬふりして居るつらさ」(六オ)

第十一 ○ぬくのはこれからおよしなさいよ

酒はさめるし夜は明かより(鷄声茅店月人跡板橋霜)ほねへ寒さが
しみとほる」(六ウ)

十 『五色染詩入紋句 三摺』(明治三年刊。伊勢屋庄之助板)

唐詩流行

五色染詩入紋句 三摺

東京 松延堂

翻蝶関人作」(見返し)

紺屋は所謂水物ながら日限をいとはず天日で乾ば自然と上りも宜と
はいへど雨天つゞきに急仕事炭火であぶらば斑が出来形のはげさへ
悪しとかや今この五色染てふは唯早染を旨として例の炭火で焙が如
き急ぎ物故校合の下染さへも見ざるから注文書とはちがひもあら
んが上仕事にて直すの間もなく唯●(そ)が俤に仕立へまはしぬ
翻蝶舎主人記」(二オ)

(絵) (二ウ)

(絵) (二オ)

なるもならぬもおまへのうでよ(成陰結実君自取若問傍人那得知)
とりもちなんぞがいるものか」(二ウ)
なみだふきくねがほをのぞき」(二)はいろこのまアやつれさん

したことはいのう(合方)きのふのふちはけふのせと(こはいろ)
いかにかはるがならひぢやとておもひいだせばこそのはる(義太
夫)もよせつぐやにはかのとき仲の町へ出てゐても(ひとよあく
れば)花のさかりはうめやしき(せきの戸)今はそれにはひきかへ
て(女綱)よふくかくしてよんだのにそんなにねられちやアわた
しやうまらなひよ(カネ)ゴン引(女)ヲヤあのかねは(小いな)
やつか(先代はぎ)七ツ八ツからかなやまへ)とむねつきだすあけ
のかね」(三ウ)

くにつかぬことだけれどもふだん(くせつして)くせつ
しておもはせぶりなそらねいり(とみ本あさき)せなかそむけて物
いはぬ(一中ふし吉原八景)あらしははれてひとしくれ(りんきら
しいが)しからしやんすなわしぢやとて)なんのいひたいことはな
い」(三ウ)

背葉がくれになくほととぎす(風吹枯木晴天雨月照平砂夏夜霜)月
がないたかくもの中」(四オ)

きやくをねかしてざしきをぬけて(冷然夜遂深白露沾人袂)とりの
なくまでなきあかす」(四ウ)

梅のはやしのかほりをたつね(わがもの)恋のおもにをかたにか
け(きよ元おかる)ほんのたびねのかり(うばたま)まくらことば
ぢや(冨本なるかみ)なかぬ日とては一日へんしもないはいな(め
くる日)さゝなきかけるうくひすの)こゑをたよりに四疊半」(五
オ)

卯月なかばにはこねのゆばで(かつを)山ほととぎすてつべんか
けて(はなし)エ、かうはつねきけりくだせあをばがくれにほ
ととぎすとはコイツハうけやしたトキニめつらしいものがゆへきて
いるぜ」だれた」(二義太夫のさみせんよ)せい八かせんざへもん

か「イ、ヤひきてぢやアねへふとさほよ」ナニ三みせんかはてなだうくのたうちとはめうださうよあんまりふしぎだからきゝやした「なんといつたへ」さほがいたんでこまります」(五ウ)

ときはあはせの身がるのころに「独騎護馬●(行)の間に「名」體初着單衣支体健」わたしや身おもでうきくらう」(六ウ)

ふたりくらさばみやまのすまい「古木寒鳥啼空山啼夜猿」しばかるてわざもいとやせぬ」(六ウ)

ぐちもじやすいもほれたがわるい(一)中くらへばたん)あめのよゆきやかぜのよもかよひくらへにまけまじと(とみ本長生)むすぶ糸にしのもとせもいのちながかけもろしらが(けさのあめ)アレねなんすかおきなんし(補元)こん八)なざけはうれど心までうらぬわたしがくがいのまこと(げん太)まくらの下へやる手さへ)つとめにはなればからしい」(七ウ)

糸にもかゝれぬたそがれげしき(夕ぐれ)ながめ見あかぬすみだ川月にふぜいをまつち山ほかけたふねが見ゆるぞへ)さくらまばゆきなかの町」(七ウ)

てがらがましくいふではないが(人生感意氣功名難復論)みんなおまへのためちやもの」(八ウ)

こゝにかうしてのがれてあるも(今我遊冥冥々者何所慕)ふぎりふせぎとおんなよけ」(八ウ)

たよりくらいはできそなものど(はぎきゝやう)ふけゆくかねにかりのこ糸(補元)落人)まだはたさむきはるかせに(ひとこ糸)つきがないたかほとゝぎす)かこちなみだにくちばかり」(九ウ)

とりとめたこともないのに糸に糸をすけて(むつとして)かへればかどのあをやぎにくもりしむねをはるさめに(けさのあめ)かたへるつゞけになが日のみちかふくらすと(このうち)常はづゝむりを

手にしてはらたてゝ)これにやおほかたわけがある」(九ウ)こまがたあたりとたか尾はいへど(秋風吹不尽總是玉關情)ぬしはいまごろもどツたか」(十ウ)

くるわぜんせいものいふ花を(芝翫けいせい)こひといふもじのすがたをはんじものとけておもひのたねとなる(一中くらへぼたん)かゝるこひちもおほつかなむねにうかべるあたことをおもふまもなくゆくみづのふかあみがさやからかさをひらくうの花)ころもがへ(こはいろ)くらへぼたんのふうぞくは「したやうへの山かつら」にしにふじがね「きたにつくは「おもひくらべ?」だてこそで(富本長せい)あたといろとをこひむらさきのつゞやはたちはいろざかり(めぐる日)かほりゆかしとまちわびかねて)ねこじてう糸しなかの町」(十一ウ)

国へゆかずと一ト花さかせ(君言不得意歸臥南山陸)人を見かへす氣になりな」(十二ウ)

おがむでさきもせんじゆにみゆる(一群嬌鳥共啼花啼花戲蝶千門側)くわんおんざつたのおかいちやう」(十二ウ)

きをむむまいとはおもふてあれど(かつら川)うはさにもぎだてがよふてなりふりまでも(山がへり)すいたらしいと思ふたがいんぐわなゑんのいとくるま(おきてみつ)かやのひろさにたゞひとり)うはきがつのればきがかはる」(十三ウ)

ふとんしきたへまくらのびやうぶ(とみ本すまふ)きみにおほせきあふよをたより人目せきわきいとふてもふたりが中へ小むすびのやくそくかたきいはたおびあらわれ月のまへがしら)もゝ手をつくしてこひすまふ」(十三ウ)

いちどあふたらいのちもいらぬ(得成比目何辞死願作鸳鸯不羨仙)たなばたさんでもわしにやまし」(十四ウ)

ふるゆきをふむもおもしろいがふますずびひが〔銀河沙羅三千界梅嶺花開一万株〕とふてくれまいこのけしき」(十四ウ)

人がほめればついきがまはり(はぎきゝやう)きみを松むしよ(とにすだく)うそとまことたまされぬきてたまされて(清元)もしやとおもふこけみれん(わかのうち)もんじゆさんはよけれどもきれるといふじがきにかゝる)見すてらりよかとあんじられ(十五オ)

つとめする身でまことをあかし(とみ本むしとり)水ももらさぬあまの川それもおよばぬことながら(かは竹)なかにたつとりす(く)とわかれのつらさにぞでしほる)そはざやむまいこのくうやくやもしほもたのみにやならぬ(ひとこゑ)いつしかしらむみぢかよにまだねもやらぬたまくらに(清元おちうど)かはい(く)めうとづれ)からすにぎこねをおこされる(十五ウ)

つきをともとてなくむしのねは(沙頭雨染班々草水面風嘯瑟瑟波)はぎの下つゆぬれたどし(十六オ)

おまへのいふことわしやまにうけて(ことば)そのやさしいことばにまよつて(ひとこと)ひとことごととにむかふうれしさに(ことば)どうしてこれが「わすらりよものかわすられぬ(ことば)つみだねへ」うそにもほれたをじつにして)すゑのくゝりをむねの内(十七ウ)

となりさしきはちん(く)かもで(比目鰲鰐真可羨双去双来君不見)こちの女郎はなせこない(十八オ)

どこへいつてもおまへのことを(宇治は茶所)なかにうはさの大吉山と(ことば)どんなにみんながほめるだらう「人のきにあふ水にあふ(ことば)にくらしいねへ」いろもかもあるすいたどし)人がほめればきかもめる(十九ウ)

はるさめに手と手と手がかさなりまして(とみ本長生)おいせぬかどのわか(く)とわか水くみのあさわかきおやどのはじめにはかまど(ときはつあはしま)おきまどはせるうたがるた(こひぞつもりてふちとなる(二十オ)

おもひきりましよあきらめましよが(かれのゆかしき)こゝろもさゆるよはの月(女なる神)さとりすませし(この身にも)じつにほんのうにやひかされる(二十ウ)

(広告)

明治三年四月

東京 松島町 伊勢屋庄之助板(裏見返し)

十一 『開化芸妓』端唄浄るり入都々逸(明治十二年

刊)

(開化芸妓)端唄浄るり都々逸

幾英画

木桑斎撰

神田 錦林堂梓(表紙)

金とき替うた(省略)(二一オ)

香水しやぼんのいろ香にまよひ(うた沢はうた)やうす売のがおまへの家業)のつたわたしは開化ぶり(二ウ)

土手の柳についまねかれて(霞の衣もえもん坂糸もんつくろふ初買)に花の江戸町京町や背中合せの松ヶ枝に松の太夫の見返りは柳桜の仲の町)恵方参りの道まよひ(二二オ)

もやひつなぎし橋間の小舟(常わづまさかど)恋はくせ者世の人の迷ひのふちせぎのどくな山よりおちる流れの身うきねの琴のそれならで)ういたはうたの水調子(二二ウ)

日増に究理は開けるけれど(義太夫廿四孝)回向しよとてお姿を写しとらせせぬものをだまして(さる官員さん名家の血筋あるならばかへるとたつた一言の)ものいふ写真がなぜ出来ぬ(三才)女の生徒がうわきななりで(ときわづ朝がほ)こがれ初たるかの人とかたらふ間さへ夏の夜の短いちぎりの本意ない別れ所尋るたよりさへ思ふにまかせぬ國の迎ひ)そつげふせぬ間に返県(きけん)する(三三ウ)

今日は土曜日とここで待て(はうた)君来ずは寐やへはいらず柴之戸へ出てはかへり(ては)ひとりくよ(かやの中)(四才)目さきに紅葉のあいきやうみせて(忠臣蔵二段目ときはづ)小浪ははつと手をつかへじつと見かわす顔とかほ互にむねに恋人と物も言れぬ赤面は梅と桜の花角力)じつと返事が出来兼る(四ウ)上等なおまへに下等のわたし(清元とばる)どうぞだかれて鼠とはかわらぬ恋の身のねがひ)中等にへだてがあるわいな(五才)はかま附てもほころびやすい(おはん清元)また三味線の手ほどきもおまへにならひ夫からがお師匠さんへ幾田流)をんな生徒のあだこゝろ(五ウ)

親ばかちやんりん(省略)(六才)
曾は巴の替歌(省略)(六ウ)
夕くれかへうた(省略)(七才)
忍ぶ恋路替うた(省略)(七ウ)
海あん寺替うた(省略)
うきな恋路の替うた(省略)(八才)

恋のやみ路に寒さもわすれ(詩人のわがもの)我物と思へばかり傘の雪(北風吹雁雪粉々)恋の重荷をかたに掛けいもがり行は冬の夜も(五心重疊凍相違)しのぶたよりの雪明り(八ウ)
橋間すれ合小舟と小ぶね(吹よ川風上れよすだれ)ぬしの恋よとむなざわき

うば玉かへうた(省略)(九才)
五音都々いづ

たとへ此身はもくづとなるも蓮の台なでアイウエオ
小くし取あげ氣をとりなをしなみだながらにカキケケコ
いかに若氣のいたりぢやとても子迄にかんなんサセセソ(九ウ)

前おなじく

水をさしあふ二人の中で恋のいきじをハヒフヘホ
人のこゝろもアノ白糸にむねのほむらがヤイエヨ(十才)

吸付烟草につるだまされて己が世帯をけむにする

金の時計が見当じやものを襟に附のはしれた事(十ウ)

花になびくも世渡り故に東風は三筋の糸やなぎ

松と言字は好るゝはづよ公と木とはさしむかひ(十一才)

わるく言りよとおまへとならば出ても嬉しい新聞に

私やくさりのつなぎめ堅く主は時計のくるひがち(十一ウ)

親が不服で添せぬならば原告式人て出訴する

車夫のけんくわをはたから見れば(めつた(金巻朱)やたらにふる(げん)(五錢)(十二才)

どふせ切らるゝかく)でしたと惜まず附出すしまだわけ

はなして居たいは山々なれどまたも蒸気の笛がなる(十二ウ)

思ひがけなく見合す顔をけむにして行汽車のまど

更にせんぎの次第もあれば極(きめ)たせいしはおとりけし(十

三才)

火事と雷りやきかいて済が防く手立のない地蔵

おひげ払でらくするよりも女工となつてぬしのそば」(十三ウ)

最早四時かと酒あたるめて待間ほどなくつのおと

ひげを延して女猫をじやらししやれりやはなげが又のびる」(十四才)

二人並んで写した写真切てもみれんで捨られぬ

主に貰ふた片身の写真森間も放してなるものか」(十四ウ)

猫じや／＼とおしやますけれど首尾能いけば二等しん

お金有やこそいやでもなびくくめん出来たらまたおいで」(十五才)

海山越ても便りは出来る切れちやいやだどでんしんき

人目つゝんで見るちわぶみはねやの小まどの月あかり

明治十一年十一月廿八日御届

編輯兼出版人 神田鍛冶町十九番地 武井佐吉」(十五ウ)

(広告)

明治十二年五月 日

御届

東京神田区鍛冶町十九番地

編輯出版元 武井佐吉」(裏見返し)

十二 『吉原どゝいつぶし』(明治初期刊)

吉原どゝいつぶし」(表紙)

角にがつとを臨日に月夜文明開化にやみはない」(一才)

うしろすがたにもしひとよんでかをがちがつてをきのどく
たれをきかせてのろけてにても五分でもすかない人じやもの」(一ウ)

むまれこきやうはわしや万代はしよきやつとうぶゆはすいどばし

おまへを見初た去年の花見たしかしやつぽにまるばをり」(二才)

じつがあるなら賞能かしなかみにきしやうもうちやいらぬ

あたるむすめのなりひらばしをみせればはなの下日本ばし

はつはたがいにうわきで出来ていまはひとりてじやうをたて」(三才)

ウ)

ゆうべしたせか車がひけぬこしがふら／＼あともどり」(三才)

ぬしと二人りが台のり車ないしやう咄しがい／＼かねる」(三ウ)

玉子のいせいで忤がおこりおこつちや車もひきかねる」(四才)

子僧車でくるしみしやんせしくじりや車でよをわたる」(四ウ)

うつゝ／＼ろではしらにもたれおきてゐながらぬしの夢(梅ポリ語

笑案)

けふかあすかのかはい／＼中も測が瀬となる世のならひ(梅ポリ常

二)(五才)

身にはおひへをまとつてゐても／＼ろに替てゐるあやにしき(梅ボ

リとく女)

いろいろあるのを初手からしればかうしたわけにはならぬもの(梅ボ

リ横利」(五ウ)

うはきといはれりや一言もないがおまへに見かへる初手のいろ(梅

ポリとく女)

なれないま男ていしのかほに泥のつくはづ／＼ろぶゆへ(サクラ川新

孝」(六才)

屏風ひとへのわり床なればしんのはなしはのこりがち(浅草大工

徳)

女房かたぎではなこそさかねじみなみさほは雪の松(梅ポリ唄たね)(六ウ)

とききつくく／＼あんじて見ればどうですへにはわかれもの(梅ポリ常二)

せつかくのこしんせつだがまつおことはりさんみやうさがしだゆめにおし(梅ポリ横利)(七オ)

気やすめ真うけで鼻毛をのばしかはりのできたもしらないで(梅ポリ玉我)

すへもしれないあだ綴むすびうはきどうしの実くらへ(梅ポリ喜三)(七ウ)

ほれた女房のあるその人になんてこんなにはれたらふ(梅ポリとく女)

さぞやさぞあんじちやあれどもひとめがあればたよりをせぬのもむりはない(梅ポリたき女)(八オ)

とてもあへねばうたゝ寐よひ寐夢であふのをたのしみに(梅ポリたき女)

友たちの亭主にほれてはすまないけれどしあんのほかなら義理もかく(浅草唄女小菊)(八ウ)

▲丸で老年たよりもしれず(新内)毎日文をもたしてたづぬれどどこにどうしていさんすやら(しれないはづだよむ)こと成

▲もふ密両しあんしかへてあるそづかしをいふも接するやすだしいしこんなつらにて蚤とりまなこほんにおぼけの運上とり(九オ)

▲ぬるすがたのかほつくく／＼とほんにせたいでやつれたか
▲主が来たとてあはてゝかやを出ればあの子にだまされる
▲芋とかぼちやでうき身をやつすまけておくれよ八百やさん(九

ウ)

十三 『都々一』(明治初期刊)

(表紙欠)

伝僧機(はりがね)が便りよ為(する)よな開化の世なら写真に苦舌が言せたい

色の世界と言のが無理か五しき色探る万国図(十一オ)
善も悪きも世間のあらを探して記載(かきだ)す新聞紙
いろはせず京と習つた子でも今じやアイウエオのサシスセソ(十

一ウ)
おくびに出しても悪いと思や食ぬ顔して知らぬふり
主の此頃顔向せぬは胸に焚火でけむいのか(十二オ)

過ちや悪いと葡萄酒隠し汲器(こつぶ)とるのも酷(すい)た中
十把束(から)げで転ぶといへば解て見せたい胸のうち(十二ウ)

姿見に写す笑顔にうつかり見とれぬしの惚しも無理でない
三味線枕にくと引寄て可愛らしいと抱く小ねこ(十三オ)

上のお世話の隅々までも届く郵便早便り
乗と曳とのちがひは有ど同じ人民車夫と客(十三ウ)

義理といふ字に人目をはちて言たい事さへ胸のうち
親類縁者の異見も聞ず立る意気地の末を見な(十四オ)

乗せて下して(ママ)乗せて客にせはしき陸娼妓(おかじようき)
神代このかた替らぬものは水の流と恋のみち(十四ウ)

お前これだけ私やこれ文と思ひちがひに食ちがひ

嬉し涙に白粉はげて素顔見らるゝ恥かしさ」(十五才)

情こゝろの種さへ蒔ば何時か真事の花がさく

知れちやならないおまはりさんに速くおやりよ立小便」(十五ウ)

海とも山とも分らぬうちに人が指さす暗射絵図

もう言んずな其気休めを疾に見透す硝子張」(十六才)

官に首れぬ私が心懸鉄(さんぎり)天窓(あたま)じやなければども

口先ばかりで腹へは入ぬ主の浮気は巻煙草」(十六ウ)

ほれたどうして遂寐過して九時の出仕が遅くなる

意気な姿で迷はず猫は着たる羽織もぎん鼠」(十七才)

顔は見へてもガラスの硝子(せうじ)内証はなしが通じない

続く日でも困りはすれど長い雨にも亦こまる」(十七ウ)

力揃へば踏石さへも揚てゆるがす霜ばしら

ひやかし雀の飛去る跡は赤い仕掛を着た案山子」(十八才)

遊手の眼玉を蛍と見なし涼しい世界にして見たい

若や夫かと立聞すれば硝子障子で聞とれず」(十八ウ)

写真になるならこゝろの内を主に見せたいこの苦勞

羅生門より晦日がこわい鬼が金札とりに来る」(十九才)

ほつとため息つく／＼詠め(常は津岩川)江戸なが崎くに／＼へ

ゆかしやんした其跡は」残る写真が癩のたね

末に車を曳うと俣よ引にひかれぬ恋の意地」(十九ウ)

明の鐘の音きゝたくないがコンとなるとはたのもししい

規則で啼のかアノ明がらすたまにや日曜(どんたく)するがよい」

(二十才)

一寸ち繩ではいかなぬ奴が三筋の糸にはしめられる

うそも誠も皆うちあけて?(はな)しや手筈とつたぐられ」(二十ウ)

十四 『いなせど』一 (明治初期刊)

(東京) げいしやいなせど、逸 (表紙)

いなせど、一 (見返し)

夫江湖上(よのなか)の流行唄は、紫陽花の色の如く、狸ぬの眼の

玉に似て、日々に換り、時々に変じ、昨日の文句今日古び、朝の唱

歌夕部に送れ往中に、ひとり独々逸のみ、復古の今も廃られず、弥

増盛んの流行ツ子、ところを附込ものする気で、急に初摺の口をか

け、先序文から斯の如し

美声散人述」(一才)

あれ見やしやんせ今朝のゆきつもる咄しもねてとける」(一ウ)

つゝむこゝろを香にしられてや風がみちびく夜のむめ」(二才)

とかくひと重は花さへ見事つくままつりのなべを見よ」(二ウ)

八重に咲花もあるのに恋路の道は障子ひとゑがまゝならぬ」(三才)

背に腹かへても今度の事は云ひせうたてずにおくものか」(三ウ)

もとめてわたしは切よといわぬしかけたけんくわはおまへから」

(四才)

鼠衣と身はさとれどもかけし表具のさくら姫」(四ウ)

ちよきのけんさき北へとむけて鉄も黄金もすひよせる」(五才)

添れない事と思案にしあんはしてもナゼ力思あんにまたしあん」

(五ウ)

あいさそうだよおいひのとふりわたしやおまへにむりばかり」(六

才)

味りんでころりと口まへ上手うかつにやのられぬしのかち(十六ウ)

はらじやないても上辺じやわらふつらひつとめの初会ぐち(七オ) 染色を何にしやうと氣をもむ内にはたでくらうをそめさせる(七ウ)

おまゑの留主にも縫針仕事はやくたいいうしる帯(八オ)

ほうばいにのろけられても取越くらうぬしじやないかとさきくゞり(八ウ)

くちツぼく成たとお前はおいひだけれどもしやつれば氣がかはる(九オ)

玉のこしより味そこしをさげてじみなくらうも得てかつ手(九ウ) どふしても落ぬ思あんにふさいでるれば夫じやわるいとなきけしり(十オ)

むしをころして聞てはゐれどおまゑがなければ一ちかばち(十ウ) 不甲斐ないぞへふさくなおよし春は木ずゑも花がさく(十一オ) 云ふに落ずにかたるにおちていつかみんなになぶられる(十一ウ) すゑをたのみに呼ずにゐればはたじやさめたときつける(十二オ)

人のうは氣を笑つたわたしどふしてこんなになつたやら(十二ウ) 春の夜かせに梅が香はこぶころとどいた四番半(十三オ)

雪の降る夜もなに寒からうふすまかさねし暖(ぬく)め鳥(十三ウ)

手宛上手につひだまされていつか綻ぶむめの花(十四オ)

梅の笑がほにさくらの媚に山吹や咲ても実がならぬ(十四ウ)

恵方まいりの三人一座ふいと名ざしの初会ぐち(十五オ)

血みちを上ゲてもぬしある花はどふせもと木へかへりさき(十五ウ)

ウ)

梅にうぐひす柳に乙鳥わたしやおまへにつきまどふ(十六オ)

ころづくしのもととはいへば思ひすぎ菜のはじめから(十六ウ) 春の夜ながらもうひけすぎてすゑをかこちて啼蛙(十七オ)

吹よ川かせ夜はしん／＼とほるのおぼろのおくりぶね(十七ウ) ほれりやうたぐるうたくりやけんくわあとじやおまへにくるめられ(十八オ)

とゞく小枝を見むきもせずにおよばぬこずえでくらうする(十八ウ)

かんしやくおさへて吞冷さけはじつにやまひの種おろし(十九オ) 春の雨夜に氣のあひどしでゑんをつなひだ歌がるた(十九ウ)

十五 『当世都々一真盛』(明治初期刊か)

当世都々一真盛

豊原周春筆

延寿堂梓(表紙)

周春ゑがく

まる鉄はん(見返し)

かうしてさうしてまたあゝしてと(冨本三かつ)あけくれおもうていませるときいてとびたつうれしさにてをあわすればそのてをとりすへにやどふとかする積り(二オ)

今じや出雲の国より恵比寿(長うた鶯娘)ゑんを結ぶのかみさんにとりあげられし嬉しきも(佐渡の土よりぼろのかみ)(二ウ)

そばへより添袖ひきとめて(二)中ぶしゑのしまおもわせぶりは誰やらが?ひの心をうつせが(三)今はんいかとぬかすば(二)オ)

浮たどふしと言われるはづよ(一)ときわづ三ツ△(二)そもやうきねの初めよりみのうへしらすきもしらす浮気どふしの中かゝるな(三)流燈会から出来た中(二)二ツ)

小敵のよるまで三すじの糸で(一)富本おちよ目もとしほよるちりめん(二)ふたへまわりのかへおび(三)苦勞するの母親の罰(三)オ)雪と名をかへ氷でさへも(一)常はづかつら川(二)はづかしいこといわはし(三)よるの契りも仇まくら(二)二度の勤めに身を削る(三)ウ)死ぬる活るの咄のなかば(一)中小はる(二)しよせんこのよはかりわけのこいにうきみをなげ(三)まだ(四)コクリ(五)と舟をこく(四)オ)巨燵に当りてざこ寝をすれば(一)常盤津うとふ(二)さすがいわきにあらざれば(三)すてゝもおかれず(四)はじめ手とてが足とあし(四)ウ)娼妓芸妓をころばし(三)すぎ(四)うた沢ひと言(五)わすらりよものかわす(六)らぬ嘘にもいふたを(七)実にして(八)今じや自分の身がたぬ(五)オ)

おかやきするの(一)か月夜(二)のからす(三)清元落人(四)かある(五)のめうとづれ(六)さきは(七)いそげど(八)ころは(九)あ(十)と(十一)明も(十二)せぬ(十三)の(十四)憎ら(十五)し(十六)る(十七)五(十八)ウ)

添ふて苦勞は覚悟(一)だけ(二)れど(三)上(四)る(五)太(六)助(七)記(八)十(九)だ(十)ん(十一)め(十二)こん(十三)な(十四)の(十五)こ(十六)を(十七)も(十八)ち(十九)な(二十)が(二十一)ら(二十二)添(二十三)わ(二十四)ぬ(二十五)先(二十六)から(二十七)この(二十八)く(二十九)ろ(三十)ふ(三十一)六(三十二)オ)

実(一)が(二)なる(三)から(四)お(五)ま(六)への(七)さ(八)け(九)を(十)にく(十一)ま(十二)れ(十三)と(十四)め(十五)は(十六)せ(十七)ぬ(十八)六(十九)ウ)君(二十)と(二十一)か(二十二)わ(二十三)した(二十四)指(二十五)輪(二十六)を(二十七)は(二十八)めて(二十九)う(三十)た(三十一)沢(三十二)ほん(三十三)に(三十四)思(三十五)へ(三十六)ば(三十七)ひ(三十八)と(三十九)の(四十)そ(四十一)し(四十二)り(四十三)も(四十四)世(四十五)の(四十六)義(四十七)理(四十八)も(四十九)思(五十)わ(五十一)ぬ(五十二)こ(五十三)い(五十四)の(五十五)三(五十六)ツ(五十七)せ(五十八)が(五十九)わ(六十)さ(六十一)が(六十二)氣(六十三)が(六十四)ね(六十五)は(六十六)親(六十七)の前(六十八)一(六十九)七(七十)オ)

甲夜(よい)にや粘着乙夜(よなか)に凝集(とみもと)かわす詞(ことば)は陸まじくありし(一)そいね(二)のいもせ(三)がわ(四)う(五)き(六)世(七)を(八)わ(九)たる(十)花(十一)いか(十二)だ(十三)明(十四)け(十五)り(十六)や(十七)分(十八)解(十九)する(二十)わ(二十一)いな(二十二)七(二十三)ウ)

中(ちゆう)が(一)宜(二)す(三)ぎ(四)て(五)口(六)舌(七)が(八)こ(九)ふ(十)じ(十一)上(十二)る(十三)り(十四)白(十五)木(十六)や(十七)そ(十八)り(十九)や(二十)き(二十一)こ(二十二)へ(二十三)ま(二十四)せ(二十五)ぬ(二十六)才(二十七)三(二十八)さん(二十九)お(三十)ま(三十一)へ(三十二)と(三十三)わ(三十四)た(三十五)し(三十六)が(三十七)そ(三十八)の(三十九)な(四十)か(四十一)は(四十二)き(四十三)の(四十四)ふ(四十五)や(四十六)け(四十七)ふ(四十八)の(四十九)こと(五十)かい(五十一)な(五十二)泣(五十三)て(五十四)見(五十五)せ(五十六)たり(五十七)笑(五十八)つ(五十九)たり(六十)八(六十一)オ)

こ(一)る(二)に(三)上(四)下(五)の(六)へ(七)だ(八)て(九)は(十)ない(十一)とい(十二)ふ(十三)は(十四)ま(十五)こと(十六)じ(十七)や(十八)み(十九)な(二十)苦(二十一)才(二十二)八(二十三)ウ)親(ちゆう)の(一)ゆる(二)さ(三)ぬ(四)不(五)儀(六)いた(七)づ(八)ら(九)で(十)叩(十一)き(十二)出(十三)され(十四)た(十五)木(十六)魚(十七)講(十八)九(十九)オ)地球(ちゆう)儀(ぎ)に(一)似(二)た(三)西(四)瓜(五)を(六)断(七)き(八)り(九)て(十)二(十一)人(十二)ま(十三)ると(十四)は(十五)よ(十六)る(十七)世界(十八)九(十九)ウ)猫(ねこ)と(一)名(二)が(三)付(四)き(五)や(六)言(七)わ(八)づ(九)と(十)知(十一)れる(十二)清(十三)元(十四)小(十五)き(十六)く(十七)し(十八)か(十九)も(二十)そ(二十一)の(二十二)とき(二十三)の(二十四)う(二十五)ち(二十六)で(二十七)ぬ(二十八)し(二十九)に(三十)は(三十一)じ(三十二)め(三十三)て(三十四)あ(三十五)い(三十六)の(三十七)ても(三十八)ひ(三十九)く(四十)と(四十一)乗(四十二)せる(四十三)が(四十四)身(四十五)の(四十六)つ(四十七)と(四十八)め(四十九)十(五十)オ)

十(じゅう)里(り)廿(にじゅう)里(り)へ(一)だ(二)て(三)居(四)ても(五)汽(六)車(七)で(八)通(九)へ(十)ば(十一)瞬(十二)間(十三)十(十四)ウ)い(一)くら(二)蝮(三)に(四)滅(五)金(六)を(七)し(八)ても(九)中(十)ぶ(十一)し(十二)よ(十三)し(十四)原(十五)八(十六)景(十七)に(十八)ほ(十九)の(二十)う(二十一)き(二十二)ね(二十三)の(二十四)み(二十五)な(二十六)が(二十七)ら(二十八)も(二十九)あ(三十)だ(三十一)に(三十二)あ(三十三)わ(三十四)づ(三十五)の(三十六)せ(三十七)いら(三十八)んと(三十九)心(四十)で(四十一)と(四十二)め(四十三)しい(四十四)つ(四十五)け(四十六)に(四十七)ど(四十八)の(四十九)鯨(五十)に(一)や(二)見(三)へ(四)か(五)ね(六)る(七)十一(八)オ)

恥(ち)か(一)し(二)き(三)恐(四)さ(五)ふ(六)た(七)つ(八)と(九)一(十)ツ(十一)の(十二)夜(十三)着(十四)へ(十五)袖(十六)を(十七)比(十八)よ(十九)く(二十)の(二十一)新(二十二)枕(二十三)十一(二十四)ウ)恵(え)比(ひ)寿(じゆう)の(一)利(二)益(三)で(四)近(五)ころ(六)布(七)袋(八)上(九)る(十)り(十一)す(十二)し(十三)や(十四)く(十五)も(十六)い(十七)に(十八)ち(十九)か(二十)き(二十一)お(二十二)ん(二十三)か(二十四)た(二十五)に(二十六)心(二十七)当(二十八)り(二十九)が(三十)三(三十一)人(三十二)十二(三十三)オ)

遠(とほ)さ(一)か(二)つ(三)た(四)は(五)世(六)間(七)の(八)手(九)ま(十)へ(十一)清(十二)元(十三)う(十四)ら(十五)里(十六)あ(十七)ふ(十八)た(十九)初(二十)手(二十一)から(二十二)か(二十三)わ(二十四)る(二十五)さ(二十六)が(二十七)身(二十八)に(二十九)し(三十)み(三十一)く(三十二)と(三十三)ほ(三十四)れ(三十五)ぬ(三十六)いて(三十七)な(三十八)ど(三十九)其(四十)場(四十一)の(四十二)間(四十三)に(四十四)合(四十五)せ(四十六)十二(四十七)ウ)寐(み)て(一)は(二)考(三)へ(四)お(五)きて(六)は(七)思(八)案(九)互(十)ひ(十一)に(十二)胸(十三)を(十四)う(十五)ち(十六)あ(十七)けて(十八)氣(十九)も(二十)あ(二十一)る(二十二)ほ(二十三)れの(二十四)す(二十五)め(二十六)た(二十七)ど(二十八)し(二十九)どう(三十)も(三十一)悴(三十二)れの(三十三)氣(三十四)が(三十五)知(三十六)れ(三十七)ぬ(三十八)十三(三十九)オ)ころ(一)つ(二)く(三)し(四)に(五)袴(六)を(七)と(八)ら(九)せ(十)ぬ(十一)れて(十二)婚(十三)し(十四)る(十五)春(十六)の(十七)雨(十八)十三(十九)ウ)旨(旨)い(一)ふ(二)び(三)ん(四)空(五)音(六)か(七)き(八)なら(九)へ(十)中(十一)あ(十二)さ(十三)ま(十四)じ(十五)千(十六)も(十七)二(十八)千(十九)も(二十)三(二十一)千(二十二)も(二十三)せ(二十四)か(二十五)る(二十六)に(二十七)ひ(二十八)と(二十九)り(三十)の(三十一)男(三十二)じ(三十三)や(三十四)と(三十五)お(三十六)だ(三十七)て(三十八)文(三十九)句(四十)の(四十一)無(四十二)心(四十三)状(四十四)十四(四十五)オ)

野暮と笑うなあめを梅はすめが凝(こ)うじてみをおとす(十
四ウ)

(広告)

東京 日本橋通三丁目十三番地

丸屋 小林鉄次郎板(裏見返し)

十六 『漢語都々逸』

漢語都々一 式篇

貞僧画

大阪綿喜梓(表紙)

狂句

外題 貞僧筆

浪花金随堂板(見返し)

○漢語百々逸ノ部

よしや交誼(かうぎ)まじはりのぎりは立ずとまよぬしの偉烈
(いれつ)すくてつよきを他よりも(一オ)

それと事状(じじやう)このしだい(い)はまだ聞ね? 顯然(げんぜ
ん)あきらかなことば お前の素振では(一ウ)

あれほど必然(ひつぜん)きつとしたこと(い)した其ことをまたも変
革(へん)かか/あらためてかほること(い)しやさんす(二オ)

人眼潜行(せんかう)しのんでゆく(い)して逢なかをにくや失策(し
つさく)やりそ(い)さされては(二ウ)

せめて一旦(いつたん)ひとあき(い)氣をいれかへて常の隔心(かく

しん/へだて(一ウ)やめさんせ(三オ)

熟慮(じゆくり)よよく/かんがへること(い)して見りやなほさら
主のことばに感銘(かんめい)ふかくよろこびむすれぬ(い)する
ばかり(三ウ)

すへのやくそく堅確(けんかく)かたくしつかりしたこと(い)とつて
ぬしの仁慮(じんり)よ/じひなおほしめし(い)をまつばかり(四オ)
わたしがいふこと主や尾撃(びげき)しりへをうつこと(い)していつ
か応戦(おうせん)こちらからもた/かふ(い)やみはせぬ(四ウ)
よしやおまへの国情(こくじやう)くにちうのこ(一ウ)にせよ無理
な応酬(おうしう)へんと(い)できはせぬ(五オ)

いややおまへの勞詞(ろうし)ねぎらひことをやめて実な就約
(じうやく)やくそく(い)ま(い)しやさんせ(五ウ)

愚論(ぐろん)おろかなろん(い)俗論(ぞくろん)いやしきろん(一オ)モ
フやめにして真実(まじつ)応接(おうせつ)お(い)せつ(い)お(い)たい(い)きめてほし(六オ)

おなこの微力(ひりよく)すこしのちからと主や氣づよくもふり
きりいなんす遺憾(ゐかん)さんねん(い)さは(六ウ)

アレまたさんせと憤発(ふんぱつ)げんきをいだす(い)してもにくや
疑心(ぎしん)うたがひ(一ウ)にいぬる氣は(七オ)

それとこ(一ウ)で垂察(すいさつ)すいりやう(い)すればまたも遺言
(さうげん)つくりことば(い)しやさんす(七ウ)

きめた約誓(やくせい)ちかひ(い)ちがはぬやうにしかと答論(とう
ろん)ろんをこたへる(い)しやさんせ(九オ)

うそのかづ(い)発炮(はつぱう)はなつてつぼう(い)せず(い)実も発表
(はつびやう)あらはし(い)してほしひ(九ウ)

慰勞(ゐらう)つかれをなくさむ(い)さ(い)んす氣は嬉しひかしん(い)実麻
志(とくし)あつき(一ウ)は余所(い)へして(十オ)

○英語百々逸部

口舌しながら寐エール(ゑいる／る氣)が出たてテール(ている／
なみだ)の中から出る笑がほ(十ウ)

ナイルデ(ないるで／夜る昼る)心に逢つめながらカシル(かしる
／当座)かつたよ逢夜さを(十一オ)

びつくりしたナイ(ない／夜に)氣がどきつくよ思はずラープ(ら
あぶ／うれし)といふてから(十一ウ)

このモルニング(もるにんぐ／あさがらす)のからすを夜るとスリ
トプ(すりとぶ／寐すこ)さしたうれしきに(十三オ)

フエース(ふゑいす／かほも)見られずモフこ?ころはラープ(ら
あぶ／うれし)い夢にも遠座かり(十三ウ)

ニー(にひ／ひざ)にウオンナイ(うをんなひ／ひと夜さ)と置な
みださへいく夜さ私しのスリフ(すりふ／そでに)とめ(十五オ)

ラープ(らあぶ／うれし)とおもふて苦をすればこそアイ(あい／
目に)立リンリ(りんり／ほそ)に氣もつかず(十五ウ)

(広告)

絵双紙仕入処 大坂心齋橋塩町角

綿喜事 前田喜兵衛

団扇仕入処 同平野町心齋橋西入北側

同支店

新板珍書発売所 同北堀江市場北入東側

同支店(裏見返し)

十七 『(新作)開化はうた』(明治初期刊。明治十八年以

前。頭書部分が都々逸)

〔新作〕開化はうた(表紙)

と、一

烏サうたれる時計は狂ふ主と同寐を正午まで

全

松といふ字は開化の文字よ君にわかれりや木ばかり(見返し)

都々逸

水がげんさへ人手はいらぬほんに開(ひらけ)た御せんさま

おなじく

猫はげいぎに娼妓はきつね客は狸のかし座しき(二オ)

と、一

赤い仕かけにふたりが中をつなぎとめたるくさり縁

おなじく

わたしや流れの隅田の燈籠ぬしを待乳の片明り(二ウ)

都々一

はがきゆうびんやりとりしたがいまはたがひの元封じ

おなじく

きれくてくやしいおもひもきうにさきへと、かぬでんしんき(二二オ)

と、逸

けむとしりつ、こゝろのあさま口のはにのる巻たばこ

全

かたく育て箱入ものをたれにとかるゝなつ水(二二ウ)

と、一

ひまなからだではもみが、ずにわたしやよふじがないわいな

全

うわき鶯もと木をわすれとなりあるきの桃のはな」(三三オ)

どゞ一ツ

てんじよふの月を見せたる丸あんどもびようぶひとへが恋の間

おなじく

根ごしさくらもきまゝにさかせいます小とりもはなしがひ」(三三ウ)

都々一

じやれつく手くだはそのふところを見ぬく時計のりようがらす

おなじく

おやじのらんぶは開化にくらしよくに手ををく米会社」(四オ)

どゞ一

にはの螢とごんさいさんはよるのつとめの身の光り

おなじく

はいすかたなは開化でよいが口でころせばおなじつみ」(四ウ)

都々一

角力じんくでよふく客にでももスツチャンちゃんのため

全

はたでわるぶがみさほをたてゝ丸いなかじやといわれない」(五オ)

どゞ一

ぶんめいとんできた蚊にチクリとさゝれ開化ないかとなでゝ見る

全

浮気なお前にくうきをとられ登りつめたるゴムの玉」(五ウ)

都々一

風りんのおとにふとめをうたゝ寐まくら月にはづかしみだれがみ

全

うそをいうのもくるわのならひすへのまことをおみなへし」(六オ)

どゞ一

ちわがこうじてあら立波も花にあらしのはなれ鶯(おし)

全

のぼりつめたるあの早月鯉みづに逢ずに風まかせ」(六ウ)

都々一

はな毛のばした昔にかわりおひげ延した人がよい

全

公債証書とあの水すましほそくも長くあしがある」(七オ)